

逗子の片岡邸の門前に響きぬ

應て坐に通りは、菊島家の家扶なり

満面の愁色、見るからに只事ならず

彼れは云はんとして、語り難く、最と叮嚀に辭議せるまゝ

奥様………

と唯だ一言

懐るより、一通の電報、取り出して後は涙なり

キクシマシヨイ、センシ

御國の爲め

夫の出征後は獨り逗子の別邸に、質素を守り親しく白瀧の不動に祈願を籠て武運の

長久を祈り朝な夕なに唯だ目出度き

凱旋の日を待つ計りが楽しみとなりて、うら淋しく、心細き中にも

然迄と思はざりしが、哀れ戦死の報に接した時は茫然として

悲嘆も憂苦も更らに覺えなく唯夢路を辿るが如き駒子嬢は、今しく佛壇に祀り在る

良人少尉の寫真に對つて

胸中無限の感慨一時に漲溢し來りて、在りし偲を偲ぶ萬斛の涙に袖を絞りつゝある

折りしも所屬聯隊の一將校より發せし一封の書狀到來せり

前略少尉殿御戦死の報せは先に大隊より申上候得しが小生は茲に謹んで、御戦死當時の模様を申上候、世に軍人として一度び戰場に出るからは、元より死は覺悟の前にて候が、老前長き年少士官の前途に數多の希望を持ちながらその初陣の犠牲と成りて、哀れ奮のまゝに散りて了ふ程世にも痛はしい事は無之

候

今回の戦闘に壯烈無比の御働らきありて、名譽の戦死を遂げ玉へし、故少尉殿の如きも正に其の一人として人の涙を催さしめられ候

故少尉殿は第一軍に従ひ玉ひ、征露の大軍に先鋒として、鴨綠江の戦争の時より已に幾多の危険を冒し而も幾多の勳功を樹てられながら今回、遼陽の攻撃に至るまで一度の御怪我も無之

殊に驪河の偵察の際には、少尉殿直先に馬を躍らせて、能く其の水流を見届け給へし如き

當時、彼の宇治川先陣の佐々木高綱を思ひ出させ、爲めに陣中誰れ云ふとなく生月少尉と申候

そは、生月、擡壘の當時を想像してに御座候

然るに昨日の戦闘に少尉殿は大和大隊長の下に徐家溝の敵に當られ、敵が苦心せ

る

半永久的の防禦工事を破つて、激しく突撃を試みられ候所、敵は兼て待ち構へ居り候事として

猛烈なる一斉射撃を喰はせ、其の爲め我が大隊は見る／＼中に三百名許り算を亂して打ち斃れ候

此の時少尉殿は、部下の一個小隊を提げ玉ひ、蝗の様に飛び來る、無數の敵彈を來ともせず

進め

と叫びながら

真先に進まれ候故、他の中隊もこれに勵まされ、同じく力を合せ候て、遂に敵の陣地を奪ひ

此所に日章旗を打ち立て候は、實に故少尉殿が勇猛なる奮闘の賜に御座候

只だ遺憾至極に候は、此の戦争の最中に御座候、何所より飛び來り候か、憎むべき一個の敵弾は

少尉殿の腹部を貫通して、惜むべき少尉殿は其場へ撞と倒れられ候、從卒は驚いて直ちに介抱申上げ繃帶所へ連れ申さんとせしに

少尉殿は手を振り玉へ

此所で死ぬるは本望である

死ぬる迄戦友の側は離れぬぞ

と仰せありて、頻りに踏み止まらんとされ候故、部下の者共打寄り、無理に戦場より擔ぎ參らせ候て、やがて野戦病院に入院相成候も、元より御重傷の事なれば、御自分にては覺悟爲遊、其身は御病床にありながら、尙ほ部下の者を呼び玉へて

貴様等は生存して、増々國家に御奉公爲し呉れよ、我れは今空しく滿洲の土と

成るが靈魂は永く留まりて、貴様等と共に國家を守護するぞ

天晴れ勇ましき御言葉を殘して、片頬に笑みを浮べ玉ふと思へば、其の儘呼んで歸らぬ人と成り玉へ候

あゝ此の名譽の御戦傷、見事の御最期、部下をして感奮せしめ玉へ、一軍の士氣更らに十倍候て、いで少尉殿の仇、思ひ知れよと、次の戦鬪を相待ち居り候
(下略)

月 日 戦友 佐藤 少尉

菊島 令夫人殿

あゝ我が良人の常日から男らしい御氣象……彼の御出發の際にも涙一滴見せ給はぬ、彼の御勇壯な御姿と其の健氣さに勵まされて、遂其の時は何とも思はで御別れもしたが

熟く思へば

世に我れ等の身程幸なきものは無いであらふ。人は華族とさへ云へば結構な身の上、氣樂なものゝ羨むで居るが

實際人間の苦樂は華族でも平民でも乞食でも皆な一樣に少しも變つた事の無いのである

苦の世界……苦の世界……此の苦の世界に生れ來て幼き時より早く温かき實の母に死に別れ、悲い淋しい中に月日を送りて憂世の春も是れよりぞ、と思ふ頃懐かしき姉上は哀れや一生を涙の裡に送りて、十九の秋に散り行く桐の一葉と共に世を去り玉へ

今又た生涯の和樂を盟ひたる戀しき戀しき我が良夫は新に戰場の露と消え給へり殘るは寡婦となりし我れ一人、最も果敢なき此の身を何に樂みに送るべき

あゝ我が良人……我が良人

心を籠めて此の駒が……朝な夕なに御身に障りの無きやう、神や佛に祈りし中斐もなく

何故なれば斯くは餘りに御武運拙なかりしぞ

「憎むべきは敵の彈

「否々

是れも皆な御國の爲なれば、妾が身は誦らめもせうが……父君や、母様の御心

思はず啜り上げつゝ泣きては堪へ、堪へては泣き、無理に心を散らさばやと今しも來りし新聞を披き見れば

先づ目に入るものは、陸海軍の公報なり

「川島武男

ハツと胸は轟きぬ

「何事ぞく」

駒子が義兄と仰ぎつゝある川島武男

駒子が結婚の媒介者たる川島武男の名は空前の大海戦たる、黄海役の負傷者中に見えたり

慰 問 袋

黄色の雲も何時しか褪せて白う紺青のやうに澄み渡れる空の所々に二つ三つ星の光りもほのかに見えて居る

門田の稲葉も夕風に戦めくなるべく、見るからに涼しうして晝間の暑苦しさも思ひ忘るるばかりなり

奇麗に掃除行き届きて撒き水の痕も滴る門内中庭の中央に納涼臺を据えて、何やら樂しげに語り居るは、天晴れ御國の爲に盡せし名譽の傷病者にて稍々輕快せる人々

の散歩を許されて此處に涼めるなりき

「やあ、武田君、何うだ今日の慰問袋は……」

「は、は、滑稽く、頗ぶる振つた物だぞ

「何にが、何につて君は何にが當つた

「美人の繪葉書……」

「は、は、そりや好く出来た成程天道様は不思議なもんだ女嫌に美人繪葉書とは、

如何にも面白いぞ……オイ佐藤君、貴様は何が當つた

「うむ僕か……僕には

「はて怪しいぞ、オイ佐藤隠す様子は臭いぞ、サア何だか早く云へ給へ

「イヤ別に臭くも無く甘くも無く怪しいような、隠すやうな物でも無いよ

「何んだ妙な事ばかり云つて、餘り大きな負傷で氣が狂つたな可哀相に、誰れかに

聞かせたら泣くだらうが

「は、僕に泣いて呉れるのは、市ちやん計りじや、ダガ餘り嬉しいのと有難いので、君達に聞かせたら腰を抜かして折角癒り掛つた砲弾傷が又た痛み出して入院の仕返しなどしては、次の戦争の間に合んで、其れが爲め金鷄勳章を取り損ねては氣の毒だから

「やあ、大變な事になつた佐藤の將軍は慰問袋を一個貰つて、嬉しいのか楽しいのか知らんが立派なキ印に成つて了つたぞ全體誰れが呉れだか知らんが随分罪だぞ

「そりや、罪かも知らんが、拜まして遣ふ、見給へ、郵便の切手が拾枚、芝居聲色の豆本が一冊……

「何んだ人を馬鹿にして、つまらない

「君達は氣が早過るよ……能くも見ないで、サア是れが見えるか、夜の薄暗い庭前でも、月明りで光つてるじやないか

ほら、金の惠比壽、大黒が……僕は肌身へ附けて守り本尊にするんだ、何んと

豪からう

「成程豪い、而し本物か……差出し人は誰れ?

「無論本物……此の目方を見玉へ二匁目は確だ……うむ寄贈者か……そりや忘れて湛るものか死んでも忘れんよ、東京久保田静子としてあるが恐れ多くも大藏大臣の令嬢だぞ……

而し妙でならぬのは、金の福の神に、芝居の聲色の本が付てるとは如何にも對照が奇じや無いか

「そりや令嬢の心盡しは至れり盡せりであるわい……其の心は斯ふなんだ、何でも福の神は何んな奴に當るか分らんが、當つた奴は悦んで氣狂ひのやうになるに違ひない其の時の材料に聲色と來たんだ……だが久保田のお嬢さんも行き届いた惡戯をやるね、さあ……佐藤君何しる御目出度いから明日は澤山奢らせるが先づ其の前祝に、聲色を遣り玉へ折角お嬢様の心配を、やらぬは罪だぞ

『よし／＼僕は餘り嬉しいので悉皆稽古して了つた……是れも戦友諸君を慰め
と云ふ久保田嬢の親切だ……嬉しいなあ畜生奴
佐藤と呼べる一等水兵は足部に負傷して縛帯してありけるが、慰問袋の嬉しさに負
傷の事も打ち忘れ直ぐ様阪東秀調を真似て、忠臣藏、山科大石宅なる内藏助妻およ
し、を語り出しぬ』

『コリヤ悴いかなればこそ其方迄が』

放埒情弱の父を見習ひ、武士の性根を失ひしぞ

母は兎もあれ、姑御様が、一所に行けとおつしやるを

否むは正しく跡へ残り、遊所通ひをする心か

あれ見よ淺野の家老職、大石親子は君恩を忘れ酒色に魂奪われて

不忠不議を働くかと、人に疎まれ指さゝれ笑わるゝのが口惜しさ

幼なき二人の弟さへ、一所に連れて行ではなるか夫れに何ぞやそち一人

跡へ残るは、不孝不義、譬へ世になきお方でも祖父様の御位牌は、此の儘置てゆ
きともないと

姑御様がおつしやる故、石塚方へ御連申し

惣領故にそなたを以て、大石の家相續と、思ひし事も情なや、跡に残るとあるか

らは

御先祖様のお怒を受け次ぎ此の母が折檻、何と骨身に答へたか』

故郷に親なく家に妻子あるをすら折ち忘れし忠勇の人々は今しも佐藤と呼べる水兵
の語りを了るや否や手拍子打て笑ひながら

『旨いぞ／＼全く骨身に答へたり』

と互ひに悦ぶも無邪氣なり

感 無 量

暮色は次第に軒を立て置め、四邊は寂閑と沈静りて時折り庭の木立から嘯く如な物音がするは、微風に葉末の露の玉が揺れては散れる音にてあるなるべし
何人の掛けしぞ、西洋室の病院には珍らしき風鈴の短冊が翻々と動く度毎に何と無ふ夜涼が襲ふて肌心地よく
晝間の苦痛も茲に漸く去つて、清く跡を絶ちたるが如くに感じつゝ、我れ知らず床を離れて玻璃窓に半面を現はせしは武男なり
折から窓にさし込む一輪の月影は武男をして胸中無限の感を起さしむるものゝ如かりき

『日清の役、黄海に傷きて身を此の病院に托したりし我れ、今又た日露の役に同じ黄海に傷きて再び此處にあらむとは

場所も場所なり、傷も傷……

奇しき縁に獨り笑ひぬ

而して思ひは更に十年の昔に馳せたり

『あゝ浪さん、浪さん

あはれ戀しき浪子が心盡しの贈り物、包みに括りし札の文字を見たる時

油紙、新聞紙、解き去りて紫の包みの出でし時、錦の袋に納めし豊川稻荷の守護札
ネルの單衣、柔らかき絹物の袴、白縮緬の兵兒帯、白き足袋、袖廣き襦袢、真綿の
肩蒲團其の數々を手にしたる時の心、箱の内より泡雪梨、芭蕉實を出せし時の心
更に手紙を披きて、熱き心の籠りし文字、涙に震へし筆の跡

見ては泣き、讀みては泣き果ては涙に袖を絞りし時の事

無限の愛の滔々として胸に漲り、晝は思ひ、夜は夢みて、今一度び逢ひ見ん事を祈りし時のこと

思ひ去り思ひ來りて、暗涙に咽びつゝありしが庭の彼方に聞ゆる人の聲
 照る月影にすかし見れば、負傷者なりける四五の水兵等が最と睦まじく語るにてあ
 りき

彼等は激戦の記念なる傷の痛さも知らざるものゝ如く

亦故郷の父母故郷の家をも忘れたるものゝ如く、空にかゝれる月の光りを浴びなが
 ら戦友互ひに樂しげに嬉しげに語りつゝあるなり

武男は彼等の胸中磊々として、一片の煩悶だになきを羨めり

慰問袋………

福の神………

聲色………

笑ふ聲、戯る聲、嬉々として聞えぬ

「慰問袋？ 慰問袋？」

武男は不圖して思ひ浮びぬ

「さうく慰問袋、忘れたり忘れたり

水兵等と共に慰問袋の配分を受け其の儘床の下へ置きて忘れたるを思ひ出せるなり

*

*

*

*

*

*

明けても暮れても變りなき、庭の景色や雲の眺めに飽き果し身の唯だ樂しみとする

ものは

新聞の配達、故郷よりの郵便物さては國民の同情に爲れる慰問袋の配分を受ける等
 の三點なり

何に不足なき身の武男、欲しと思ふ心は微塵もあらねども、徒然の餘り水兵等の中
 に交りて、鬼が出るか蛇が出るかと開きながら

幼雑園の坊ちやん達が寄贈せるポンチの繪本に、鷹を抱へて傷の痛みを忘るゝ事も

度々なりき

今しも手にせる一個の袋は先刻分配を受けたるものなり

贈くれる人は誰れ？

中は何有に？

見ぬ間の楽しみ？

明けて悔しい玉手函？

笑ひながら開らき明れば

匂ひを含める錦の小袋

中には

『豊川稻荷の守護札』

ヘテ不思議

粗末にしてはならぬ

と恭く戴きながら

其の名を見れば、贈りし人は

『東京新橋、中村榮二』

と記せし女文字なり

女か……男か……文字は確かに女なれども其名は確かに男子なり、殊には豊川

稻荷の守護札……

這は必らず、其の子を出征せしめつゝある老人が、我が子を思ひ、又た他を思ふ

奇篤の心より殊勝にも

豊川稻荷に参詣して、請けたる札を贈りしなるべし、文字は孫か嫁の代書せるもの

ならむ

讀めたり讀めたり

『篤志の老人、中村榮二』

神に祈りを籠めて、人の無事を願ふが如きは、慈悲慈善の篤志家にあらざれば出来ぬ事なり、我れは其の志を謝せざるべからず
 其れに付けても不思議なり、不思議なり實に不思議と云ふべきは、我が身に豊川稻荷、如何なれば斯く迄に御縁の深きぞ
 今も思へり十年の昔、室は變れど、變らぬ此の病院にありし時、浪さんが心を籠めて送り呉れし

豊川稻荷の御守

我れは戀しき人の信心籠めたる賜ぞと、押戴きて十年一日の如く朝夕心に念すると共に肌身離さでありしが
 過る黄海の役、胸に受けたる敵の弾、身は粉微塵と思ひきや、負傷は足に止まりて不思議の生命
 素より惜しむ生命にあらねども

神の利益のあらたかなる
 斯く迄に我れを守らせ給ふかと思へば嬉しさ有難さ、浪さんの心盡しと共に一日も忘れざりしが今又た

此の御守護札

武男は奇しき縁に驚くものゝ如く身を床に横へしまゝ、千萬無量の感慨に沈みぬ

奇 縁

前略、昨春以來諸君の國事に奔走せらるゝや日も亦た足らず、或は國債の應募、恤兵金品の寄贈、或は出征留守宅及び、戦歿遺族の保護等、實に枚擧するに暇なく其熱誠と御同情の篤き

我々出征軍人の常に感謝に堪えざる處に御座候然るに今又た最も趣味多き慰問袋を御寄贈相成り候事

身を床上に横へしまゝ無聊に苦しむ、傷病者の歡喜、實に手の舞ひ足の踏む處を知らざるものゝ如くに御座候

就ては茲に自分に分配せられ候當時の有様を記して聊か御禮の意を表し申候

時は八月廿五日午後一時頃、佐世保海軍病院へ、我々傷病者の爲に莫大なる恤兵品の到着したる由を耳に仕り候

次で又た其の恤兵品は、東京京橋區の御有志諸君より御寄贈相成候、慰問袋なりとの噂を聞き申候

依て在院中の將校下士卒中東京に縁故の人々多く有之候故、何れも鶴首して其の分配を待たざるものとして無之只管悦び居り候

されど之れを各自に分配候迄には自から其の手續きと順序との有之候て終に

翌二十六日を待つべき事に相成候

夢に入る慰問袋や春心地

明れば二十六日天晴れ風涼しく、清冷爽快の景色は殘暑の苦熱も知らざるが如く傷病の痛さも忘るゝ計り昨日より夢にまで見て、いとゞ待ち焦れたる慰問袋の分配を受くべき嬉しさ樂しさは

幼き頃父より東京土産を貰ひし昔の事など坐ろに偲ばれ申候

應て慰問袋は、各病室より順に一つ宛分配せられ候得ば皆々取る手遅しと袋の中を探りては、甲は何に、乙は何に、丙は何々と數十名打ち集ひ候て

其の賑かさ樂しさ、面白きこと、お正月の福引などの遠く及ぶ處に無之、何れも傷病の苦痛を慰めしもの如何ばかりなりしか、其の喜びの有様筆にも紙にも盡し難き程に御座候

殊に面白かり候は佐藤と申す部下の一水兵が黄金の大黒、恵比壽と芝居の聲色を

記せし小本を當て候て餘りの嬉しさに其の聲色を真似候處非常なる大喝采を博し申候

又た嬉しかりし者は小生に御座候即ち貴下が我等同胞の安全を思召の御心よりして御祈願被下候、豊川稻荷の御守、日頃信心候小生に相當り候には如何にも不思議な感念の生ずると共に嬉しく難有奉存候、目下は負傷も日々快方に進みつゝあり候に付全快の上は再び本隊に復し
貴下が御心盡し、御守を肌身に付て愈々國家の爲に奮戦可致候間幸に御安意被下度先は感謝の意申述べ度く斯の如くに御座候也

佐世保病院にて

川 島 武 男

中 村 榮 二 様

月 日

武男は何處迄も榮二を男子と思へるなり老人と思へるなり、隠居と思へるなり、中村榮二、彼は老爺にあらず隠居にあらず、而も花の如き美人にして實に新橋の名妓なりき

有 雨 有 煙

夕暮告ぐる増上寺の鐘に耳傾けながら酔歩蹣跚、土橋にかゝれるは御用商人として知られし例の山木兵造なり

折りから江木寫真館の後より堀端に沿ふて、今しも土橋を渡らんとせる山口磯太折り悪しと此方へ逃げんとする一刹那
早くも夫れと見し、山木

『やあ………山口君？ 暫らくでした』

山口は左も、不意の言葉に驚けるが如く

『やあ……山木君でしたか、大に御無沙汰しました

例の件よ其の儘にしてねエ、甚だ濟ぬ譯だが

實は北海道の事業が、是れからと云ふ矢先に此の戦争で

折角の目論見も中止の悲境さ

彼れは、曾て山木の娘、お豊を、川島家の後妻に周旋すべきの依頼を受けし時

成功料二千圓の契約に對し

萬全を期し其の報酬を抵當に、幾分を借用して策士の腕は斯んなものぞと

獨り悦に入り居りしも山木とて、さる者なり時折り急所を衝ての催促に

隠居の持病、武男の航海など、其場々の口實に一時を遁れ居りしが

去らば愈々縁談は見込みなきものとして例の御用達をと

今は何れにしても延つ引きならぬ折りから

折りもくとして、日露の開戦

是れぞ策士の乗ずる所なりとて、武男の出征を機として有耶無耶の間に身を隠しつ

ゝありしが、今しも圖らず土橋に出會して

悪い事は出来ぬと思ひながらも、相手が相手だけに却つて其懐ろに喰ひ入りて浮か

ばん事を巧みしなり

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

『は、山木君が時節がら御多忙の身にありながら御徒歩とは、お珍らしいじや
ないか……大方化け込みの

と單刀直入先づ其の急所を衝けり

衝かれし山木、彼れも又た策士の魂膽を知れり乗せられて乗り乗りて其の奥に達せ
んとするなり

されば直ちに笑顔を作りて

「流石は山口君の活眼、恐縮の外なし

と忽ち軟化せるを睨める磯太

「そりや山口式の睨みは違つたもので御座る

殊に天眼通の特許を得た丈けで心の底迄で透視が出来るから

「隠さんとして隠すを得んや?

「は、先あ其様なものだ、今十年も先へ進むと、此の山口式の睨みが續々殖へて来て

チト山氣のある奴は大方、千里眼位の名を付けて天下を騒がすであらふよ

「さうかも知らん……何しろ、君の睨みは恐しいものだ

まあ、久し振りで話そうから兎に角、來給へよ

と山木は遂に山口の策に乗しものゝ如く彼れを促して何れにか誘はんとせり

山口は心に、占たと笑ひながら

「有レ雨有レ煙又有レ雲?

「は、は、

三十間堀の待合、氣樂の一室に陶然として語りつゝあるは、山木兵造と山口磯太の二人なり

藝者待つ間の徒然にや

女將、相手のされ口も止んで、話は目下の戦争談に入りぬ

山口は膝を打つて山木に向へり

「ね、山木君國と國とが、死活の戦争をして軍資を傾け、國民の家々では働き盛り

の大事な息子を戦場に送つて留守には

役にも立ぬ爺さん、婆さんが其日の生活にすら困り果て世は凡てに不景氣に泣い

て居るにも係はらず

獨り天下、國家の苦みを他所に見ながら、巨萬の金を儲けつゝ、喇叭の聲を三味線の音と聞き流して、天下の苦勞を知らず顔なるは、山木君をはじめ、御用商人の面々である

悪く云ひば火事場の泥棒、何うせ取るのは泡吹金

さあドシ／＼奢り給へよ、五百や千の目腐れ金、催促は酒に流してと酔る振りして早くも一本を打ち込みぬ、然れども山木は知らざるものゝ如く無言に笑ふのみ

* * * * *

御用商人

山木は戦争談を好まざるなり、強て之を僻けんとしつゝあるなり
漸く彼れは思ひ當るものゝ如く

山口君、先刻君が話した北海道の事業とやらで思ひ出したが

戦勝の結果は無論樺太は我が領土となるに違ひない、夫れに就いて一つの計畫があるが其の運動を君に依頼し度いのである、成功の上は一切の支配權を擧げて君に委任するが如何だらう……して其の内容は立派な國家的事業なんだ

「は、山木君の國家的事業とは近頃耳寄りの話だ

而し君も今迄で随分國家の血を吸つて自分の肉を肥した……

いや何に立派に普譜が出来たと云ふ事……

だから其の恩返しに宜しく國家的事業を遣るべしだ

見給ひ湯島の高島商會、彼れも近年迄はソリヤ御話にならぬ男であつたが、或る軍人に引立てられたが抑もの縁、君と同じに御用商人となつて、有ゆる方面に對する其運動の手腕と來ちやあ、實に恐ろしいものだ

僕も代議士時代の頃は、電氣事業のことで屢々主人にも遇たが、之れも日清戦争より北清事件にかけて濡れ手に粟の金儲け

是れ見よがしに湯島の町内を赤煉瓦に包んで高臺の見晴し、大都の半面を我が物顔に見下して猶ほ飽き足らず、素的な金を出して隣りの地所を買ひ取つて其處に住んで居た二十戸計りの家々に退去を命じたが

其の遣り方が實に巧妙なものだよ、流石は其の道筋の連中を手玉に丸めて、焼て粉にして吹き飛ばす……やア……失敬……同じ狸の君を眼前に置いて……は、失敬かしら何しろ酔てるから仕方が無いや……まあ聞き玉ひ君等も矢張り公然の泥棒だから

前非を悔いて善心に立ち還る時の参考にするがいゝや

其處で君……高島の婆さんは、地主の大河を呼んで

二十戸の借家人が各々温順しく家屋を明けて引越をしたならば、御邸より特別に

二十圓宛のお金を立退き料に被下るよと、ふれさしたさうな

すると二十餘戸の人々はマア御親切な、高島様、もし御機嫌を悪くしたならば折角の御思召、お流れになつては大變である、何しろ此の暮れ近くに頂戴物とは辱ないとして何れも越して了つた

此所迄は何れも悦んで居たが、扱て其の引越先が何れも鬼門と來たから湛つたものでない、二十餘軒の人々揃ひも揃つて家族に病人が出たので、サア驚いた

斯んな目に遇ふのも皆んな高島さんが無暗に追つ立たからだ

と散々に怨んださうだがそりや、マア仕方が無いとして今度は其の附近の人々だ二十餘戸の家屋が取り拂はれて例の煉瓦煉が延長して來ると町内は片側町になつ

て淋びれて了ふ、商ひ高が滅て了ふ、用心は悪くなる、夫れも又た仕方が無いとして、唯だ如何にも氣に喰はぬのは高島家は、不思議にも近所へ金を落す事が嫌いと見えて、炭でも薪でも、豆腐でも町内の人からは買はぬことぢや

だから近所の人は誰れ一人心腹するものは無い、陽べには仕方無しにペコ〜と御辭議はして居るものゝ陰へ廻つては

何んだ高島が何うしたんだ、お邸も糞もあるもんか、毎朝近所のものに犬の糞の始末ばかりさせながら平気で居るのも不屈な奴だ

親が親で新聞に、叩かれた丈けあつて其の子も其子だ未だ十七の小僧の癖に生意氣な、天神の、お三藝者を買て梅に縁ある梅印の、因果は的面……母衣車に乗て病院通いも中々、念入の代物とて逐々入院して了ふんで餘程お目出度いや

さあ斯ふなると世間の噂だ畑けが畑け丈けに芋も芋だ、犬の糞の掃除、町内の淋れ、虎の威を藉る狐の小僧共迄が、大きな面して

と取々の噂の耳に入りしか、夫れとも國民の血を吸ひ取りし罪の恐ろしと思ひしものか、俄かに稻荷を祀るやら大師を信心するやら、夫れ養育院の川施我鬼のと其の爲す事が悉く、廣目屋の廣告式さ、馬鹿しい、寺や坊主に入れ揚げたり、大根役者に振り撒いたり、慈善か偽善か、廣告か勝手な真似何に一つとして國家的事業として見るべきものは無いのぢや

だから山木君、君も國家的、事業など云ひ出すからは、今迄多くの官人輩を犠牲にして暴利を掴みし罪も悔るであらふ

愈々後悔して慈善心が起つたならば之れを實行するに高島の例を踏み給ふな

何かの口實の下に、大官共を集めて園遊會でもするやうな事があつたならば、先づ近所の迷惑に氣を付け給へよ、馬車、自働車が、轟々として其の五月蠅ことを察し玉へよ

徒らに御祭り騒ぎをして、廣目屋を真似るよりも、近隣の人々に心を注げ給ひよ

而し山木君、僕は可笑くてならぬのは、高島の婆さんを見ると直ぐに川島の婆さんを思ひ出すよ、彼の身體の肥り具合と云ひ、新もの好きの飽き安い所、機嫌界の所、胡麻さへ摺れば請けの好い所等は能くも似たものである、唯だ違ふのは、高野詣りとか、川施我鬼とかと云つては一と山三文の西瓜坊主を集めて例の廣目屋騒ぎをしようと、せぬたけの相違ぢや

山口磯太は酒興に乗りて熾んに辨じつゝある折から彼方に鶯の聲

「今晚は……」

と現はれしは新橋の二嬌なり

*

！*

*

*

*

*

*

*

*

*

嬉 し 涙

黄海激戦の大捷に萬歳を唱へし榮二は、更らに其の詳報を見て泣けり

そは、御無事にあれかしと祈る其の人が意外にも負傷將校の筆頭にある事なり

「脚部とあれば、御生命に御障りなきは、御察し申す事の出来得れど、御怪我の程

度は抑も如何に、御尋ねするにも先は、我が身の名さい御存じなきに、何とて御

尋ねする事が出来ようや

夫れと共に思ひ浮ぶことあり、そは四五日前に新橋の一同より佐世保病院に寄贈し

たる慰問袋なり

「もしやと思つて

豊川様の御守りを……」

何卒神様の御利験で御手許へ届いたならば、我が身はどんなに嬉しいであらふ

と種々に思ひ亂るゝ折りも折りなり思ひも寄らぬ一封の書狀到來しぬ

『佐世保にて川島武男より、中村榮二殿』

榮二は見るより袴と抱いて泣けり、嬉しと計りに泣けり

『如何して此の御手紙が……』

何日ぞや豊川様の御園に急ぐ事なく何事も自然に任せよと仰せありしが

自然々々是れが自然に來た賜のであらふ

と轟く胸を漸々に沈めつゝ書狀を開き見て又た驚けり

『不思議……不思議……』

もしや、と心を籠めて送りける、其の御守りの、圖らずも意中の人の手に入りしに悦べる榮二は、而も其の人が浪子嬢より送られし同じ、お守札によりて、危難を免れしに驚けり、

身を正し襟を正し直ちに、赤坂の空、豊川稻荷の祠堂に向つて遙拜せり』

又は讀み又は讀み返して漸く心の沈まると共に其書狀は、女性としての榮二に宛てたるものにあらずして、男として立派なる主人公としての中村榮二に寄せたるものなるを知れり

其筈なり、榮二は武男を知れるも、武男は榮二の何人たるを知らざるなり

憐れ、戀に焦れて而も其の片戀に惱みつゝあるを知らざるなり

武男の爲めに神佛を祈り赤坂に日參して

武運の長久を願ひつゝあるを知らざるなり

『心を籠めし錦の袋の中』

願くは、戀人の手に入りて其人を守らせ給へ

と念じつゝ送りし人の女性にして而も我れに焦れつ惱みつある榮二の、藝名たるを知らずして

送り來れる書狀なる事を覺りけるなり

読み了り繰り返し、又た幾度か眺めて後ち元の封袋に納めて莞爾と笑ひし榮二は一人心に思ひなりき

「妾を女性と知り給はざりしこそ、幸なり」

もし妾を女性と知り、而も藝妓なりと知り玉は如何で斯る嬉しき御筆を玉はるべきぞ

斯くなりて、斯る御筆を給はりしも皆な豊川様の御利益………大きな望み、出来ぬ願を起してはならぬ、必ず時節を待つべしとの御闊、さてく有難い事であると或は案じ或は喜びつ

果は他の戀路の可笑しさを笑ひし身が、我が身もいつか戀の闇路に入り初めて行衛も知らぬ心の迷ひに斯く迄になりけるか、と自からも其の可笑しさに耻らいぬ

新 來 の 客

武男は病院に在りて執事の見舞を受け其の言葉によりて菊島少尉の戦死を聞き更に駒子よりの書信によりて其詳細を知り、花々しき最後を羨みては又た更に廣瀬白石二兄の戦死を偲びて千行の涙を袖に絞りつゝ、
懇ろなる吊詞を東京に送りけるが其日の午後新來の士官の我が病床に向ひて入院せるに接しぬ

士官は誰れ？

素より親しき戦友にして、上村艦隊に屬せる勇士が………蔚山沖の海戦に傷つきて來たれるなり

傷は左腕に二ヶ所の弾片を受け居れど經過頗る良好にて、盛んなる元氣は猶ほ戰場に於けるが如くなりき

士官は武男を見て

「ヤア川島君？ 暫らく

「ウム松井君？ 如何して………而しお目出度う、逐々浦鹽を遣つけたさうだ、願

くは戦況を聞かせて呉れ玉へ………

「は、到底君達の、黄海には及びもつかんよ

松井と呼れし士官は謙遜の辭を以て海戦の状況を語り出しぬ

「ねエ川島君、我が上村艦隊は豫定の通りさ………先づ對馬海峡に構へて敵や來る

かと待つて居たのは

恰度君等が黄海に、旅順艦隊を遣つて居た頃だよ

さあ其の十日頃から三日ばかりの間は天氣が兎角曇り勝で、加之例の濃氣が一

面に立ち置めて、二三海里の先は全然見分けのつかぬ位さ

而し十四日の夜明けからは、幸ひにも空が晴れて自由に四邊が見える様に成つて來たよ、そこで我が艦隊は積る怨敵を捜しながら、韓國の蔚山沖まで行くと遙か左りの方に當つて見覚えのある浦鹽艦隊が而も三隻一列に成て、南の方へ走つて居る様子がありくと見えてるぢやないか

喃、川島君、此の時我が艦隊の喜悅と來ちやあ………坊ちゃん、阿母さんからお菓子を買つたよりも嬉しく、最々、今思つても肉が震へ出すよ

此の時、戦鬪旗は、高く出雲、磐手の、檣に掲げられて直ぐに全艦隊は、戦鬪準備をして次第に敵に近づくと、馬鹿々々しいや

敵は、それと見るより早くもう、舵を旋らして、又た浦鹽方面へ引返へす様子折角の敵を逃して堪るものかと、此方も隙かさす忽ち北へ廻つて敵の逃げ路を遮つて了つたが

見ると敵の艦隊は、旗艦のロシヤを先頭にしてクロムボイ、リユーリックの二隻も有り丈の速力を出して、北の方へ走り通しさ
 そこで午前五時半頃に、我れから先づ砲門を開いて戦を挑んで行くので敵も、最う仕方がなく覺悟したものと見えて
 彼れも火蓋を切つて此所に愈々激しい砲戦が初まつて暫時の間は雙方とも、必死に成て闘つて居たよ

所で、我が艦隊は、始終敵の前面に立ち閉がつて巧みに敵艦の正面に向つて、用捨もなく砲彈を食はしたので
 殆んど一發の空彈も無く、見る／＼中に敵は少からぬ損害を受けて、頗ぶ苦戦の體に見えて來たよ
 彼れ是れする中に敵は最う愈々、敵はぬものと悟つて、死物狂に成つて漸々針路を轉じ一目散に逃げ出したが

可哀さうなのは、後陣に居た、リユーリックは他の二艦に比べると、餘程速力が劣つて居るので思ふ様に逃げる事が出來ず、ウロ／＼して居る中に早くも我が艦隊に追付かれ

四方から取り巻かれて隙間も無く射撃を受けたので堪つたものでない、應て全艦は黒煙に包まれて、もう沈没する計りに成つて了つたが

此の状況を見ると他の二艦も流石に見捨てるに忍びぬと見えて引返へして助けに來たものゝ夫れ等も亦た我が砲彈を頂戴して、火災を起し
 壯んに立ち昇る黒煙に、さしにも廣い海原も濛々として物凄く見えたが而し黃海には及ぶまいよ

だが、感心なのは、敵も一生懸命になつて、如何にかして此のリユーリックを此所から救ひ出さうとして頻りに發砲したもののゝ我が艦隊の利は益々多く、敵の損害は愈々烈しくなつたが

此の間凡そ四時間の戦闘に敵は屢々火災を起すと云ふ騒ぎで、とても、味方を助け合てる暇の無いので、遂々断念めをつけてあらん限りの速力を出して逃げて了つた

あさ愈々可哀相に成て来たのはリユーリックだ

此の時恰度此處へ來掛つたは瓜生司令官の第四艦隊で我れも我れもと

戦列に加はつたので上村長官は、リユーリックを此の連中に委かせて、自分は、

出雲、岩手、吾妻、常盤の四艦を擧げて息をも次かず追駈けたが

敵は損害こそ受けて居るけれど元より優れた速力には少しも變りなく一生懸命に

逃げる其の早さに、我が艦隊は如何に心が焦つても殘念ながら追付く事が出来ず

遂々追撃を止めて引返す事になつた

そこで又た滑稽なのは、リユーリックだ我が艦隊に代つて、浪速、高千穂の向つたのを見ると、高が二隻の小艦と侮つて、死に懸けた奴が急に又た元氣を出して

小癩にも

瓜生艦隊に向つて又た發砲を試みたが、元より此方は新手の勢で、愈々猛烈に射撃を加へるので、彼等も今は進退谷まよりしまゝ、

遂には乗組の將校も士卒も上甲板から海の中へ我れも我れもと飛び込んで了ふ、其の中に艦體も、恰度逆立に成つて沈没さ……

そこで海上一面は木の葉を散らした様に艦隊の乗組が板子に、すがるあれば、浮袋に取りついて、頻りに悲鳴を揚げて居るので、我が艦隊からは急いで端艇を卸し、彼等を救ひにかゝると

元より命を惜しむ露軍の連中は、おめく我が手に泣き付いて捕虜と成つて救ひ揚げられたものが六百一人とは驚くじやないか

而し彼等も戦闘力のある間は出來得る限り闘つて遂に其の艦を失ひ、其の身も力盡きるに至つて初めて降伏したのは敵ながら亦た感心すべき所であるよ

僕か………僕の負傷は、野村少佐、藤野少佐等と共に確かロシアから打ち出した弾片に遣られたものだ………何有に軽くつて入院する程ぢや無いんだよ………時に川島君、新聞で見ると菊島少尉が戦死されたさうだが先途多望の身が惜しい事したねエ

武男は、上村艦隊の大捷を悦ぶと共に、思ひは逆かに菊島少尉の戦死に及び残れる駒子の心の中、浪子に別れし後の我が身の心に比らべて、一種の感念は知らず知らず胸邊に浮び出でけり

壯 烈 無 比

武男の負傷全く癒えて本隊に復してより年は改まり月は閱して五月に入りぬ

時しも久しく佛領沿海に出没して潜かに戦闘準備に汲々たりし彼の波羅的艦隊は大に決心する所あるものゝ如く、上海附近に其の小艦隊を出現せしめて吾が艦隊を牽制し乍ら第二第三兩艦隊の主力は健氣にも北進の途に上れり

此の前後に於ける我が艦隊の行動は如何に、所謂る能ある應は爪を匿すの喻へ影を晦まし聲を潜めつゝ敵の一旦我が囊中に入るを見るや迅雷耳を掩ふの暇なく閃電一過直ちに其の生命を奪ひ去りて有史以來の大海戦と共に世界空前の大勝利を収めたり

敵艦が佛國領海を去りたるは佛國の抗議に餘儀なくせられたるが爲なる乎將た任意の發動に出でたるなる乎、敵の主將口提督は中立問題に關して國際上の危機を生ずべしとの説に對し飽迄、輕侮の意を表し、一切の問題に頓着なく唯々己が欲する所を行はん事を公言して任意の行動を取りたるなりと

果然敵艦隊の一部は上海附近に現れたり其の二三の敵艦が此の方面に於て我が艦隊

を牽制しつゝあるの際其の主力は益々北航を續け五月二十七日我が艦隊は對馬海峡に於て之を發見し、茲に未曾有の大海戦は其の東水道に於て開かれたり
 未曾有の大海戦は未曾有の長海戦となれり、而して東郷長官によりて壯烈無比なる報告は我が同胞の頭上に落ち來れり

天佑と神助に因り我が聯合艦隊は、五月二十七八日、敵の第二、第三艦隊と日本海に戦ふて遂に殆んど之を撃滅することを得たり

始め敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基き當隊は豫め之を近海に迎撃するの計畫を定め、朝鮮海峡に全力を集中して徐に敵の北上を待ちしが

敵は一時安南沿岸に寄泊したるの後、漸次北行し來りしを以て、其我が近海に到達すべし數日前より、豫定の如く數隻の哨艦を南方警戒線に配備し、各戦列部隊は一切の戦備を整へ、直に出動し得る姿勢を持して、各其根據地に泊在せり、果然二十

七日午前五時に至り、南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は

敵艦隊二〇三地點に見ゆ、敵は東水道に向ふものゝ如しと警報し、全軍勇躍直に發動し、各部隊は豫定の部署に準じて、對敵行動を開始せり、午前七時南方警戒線の左翼哨艦たりし和泉、亦敵艦隊を發見して、敵既に宇久島の北西二十五海里の地點に達し、北東に航進するを報じ、巡洋艦隊(片岡中將直率)東郷(正路)戦隊續て出羽戦隊も、午時十時、十一時の交、壹岐、對馬の間に於て敵と觸接し

爾後沖の島附近に至るまで、此等の諸隊は、時々敵の砲撃を受けしも、終始能く之と觸接を保持し、詳に時々刻々の敵情を電報せしかば、此日海上濃氣深く、展望五海里以外に及ばざりしも、數十海里を隔つる敵影、恰も眼界に映するが如く、未だ敵を見ざる前既に敵の戦列部隊は、其第二、第三艦隊の全力にして、特務艦船約七隻を伴ふこと、敵の陣形は二列縦陣にして、其主力は右翼列の先頭に占位し、特務艦船は後尾に續行せること、又敵の速力は約十二節にして、尙は北東に航進せるこ

と等を知り、本職は之に依り我主力を以て、午後二時頃沖の島附近に敵を迎へ、先づ其左翼列先頭より、撃破せんとする心算を立るを得たり

主力隊(主戦艦隊)東郷大將直率「裝甲巡洋艦隊」上村中將直率「瓜生戰隊」及各驅逐隊は、正午頃既に沖の島北方約十海里に達し、敵の左側に出んが爲め、更に西方に針路を執りしが、午後一時三十分頃、出羽戰隊巡洋艦隊及び東郷(正路)戰隊等も敵と觸接を保ちつゝ、相前後して漸次に來り合し、同時四十五分に至り、正に我左舷前方數海里に、始て敵影を發見せり、敵は豫期の如く、其右翼列の先頭に、ポロチノ型戰艦四隻の主力戰隊を置き、ヲスラビヤ、シソイベリキ、ナワリン、ナヒモフより成る一隊、左翼列の先頭に占位し、ニコライ一世外海防艦三隻より成る一隊之に次ぎ、ゼムチユーク、イズムルードの二艦は、兩列の間に介立して、前方を警戒せるもの、如く、尙其後方濛氣の中に、オレグ、アウロラ以下二三等巡洋艦の一隊、ドミトリドンスコイ、ウラジミルモノマフ、其他特務艦船等數艇に亘りて、連綿航續するを仄に認むるを得たり

是に於て全軍に戰鬪開始を令し、同時五十五分視界内に在る我全艦隊に對し、皇國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよの信號を掲揚せり、而して主戦艦隊は、少時南西に向首し、敵と反航通過すると思せしが、午後二時五分急に東に折れ其正面を變じて、斜に敵の先頭を壓迫し、裝甲巡洋艦隊も續航して、其後に連り、出羽戰隊、瓜生戰隊、巡洋艦隊及東郷(正路)戰隊は、豫定戰策に準じ、孰も南下して敵の後尾を衝けり、之を當日戰鬪開始の際に於ける彼我の對勢とす

敵の先頭部隊は、主戦艦隊の壓迫を受けて、稍其右舷に轉舵し、午後二時八分、彼より砲火を開始せしが、我は暫く之に耐て、射距離六千米突に入るに及び、猛烈に敵の兩先頭艦に砲火を集中せり、敵は之が爲め益々東南に擊壓せらるゝもの、如

く、其左右兩列共に漸次東方に變針し、自然に不規則なる單縱陣を形成して、我と並航の姿勢を執り、其左翼列の先頭艦たりし、ヲスラビヤの如きは、須臾にして撃破せられ、大火災を起して、戦列より脱せり、此時に當り、装甲巡洋艦隊も、既に盡く主戦艦隊の後方に列し、我全隊の掩撃砲火は、射距離の短縮と共に、益々顯著なる効果を呈し、敵の旗艦クニヤージスワロフ二番艦皇帝アレキサンドル三世も大火災に罹り、戦列を離れ、敵の陣形愈々亂れ、後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く、其騰煙西風に靡きて、忽ち海上一面を蔽ひ、濃氣と共に全く敵影を包み、主戦艦隊の如きは、爲めに一時射撃を中止せるの状況なり

又我軍に於ても各艦多少の損害を蒙り、淺間の如きは後部水線に近く、三彈を受けて舵機を損じ、且つ浸水甚しく、一時止むを得ず列外に落伍せしが、幾もなく應急修理して、再び戦列に入れり、之れ午後二時四十五分、前後に於ける彼我主力の戦況にして、勝敗は既に此間に決せり

我主力隊は、如此敵を南方に撃壓し、煙霧の中、敵影を發見する毎に緩徐に之を砲撃しつゝ、午後三時頃には既に敵の前路に出で、約南東に向針しありしが、敵は俄に北方に向首し、我後尾を回はりて、北走せんとするが如きを以て、主戦艦隊は急に左十六點に一齊回頭し、日進を嚮導として北西に向ひ、装甲巡洋艦隊も其通跡を過ぎたる後、正面を變じて之に續き

再び敵を南方に撃壓し、之を猛射し、午後三時七分敵艦ゼムチエークは、装甲巡洋艦隊の後方に突進し來りしも、遂に我砲火に因り、多大の損害を蒙り、既に戦闘力を失ひたるオスラビヤも、同時十分に沈没し、孤立せしクニヤージ、スワロフは、益々大破して其一艦二煙突を失ひ、全艦煙燭に包まれて、操縦する能はず

混亂せる爾餘の諸敵艦も、更に多大の損害を受けつゝ、又其針路を東方に採れり、是に於て主戦艦隊も、亦一齊に右十六點に回頭し、装甲巡洋艦隊之れに次ぎ、遁るを追て益々敗敵を掩撃し、時々機を見て水雷發射をも試み、午後四時四十五分頃に

至る迄、主隊の戦闘に就ては、別に著しき現象無く、始終敵を南方に壓して、砲撃を継続したるに過ぎず、此間壯烈の事蹟として、特記すべきは、千早及廣瀬（順太郎）驅逐艦が、午後三時四十分の頃、鈴木（貫太郎）驅逐隊が、午後四時四十五分の頃、敵の廢艦スワロフに對し

勇敢なる水雷攻撃を決定したることにて、前者の奏効は確實ならざりしも、後者より發せし一水雷は、敵艦の左舷後部に命中し、須臾にして艦體十度計り傾斜するを見たり、此の兩回の襲撃中、廣瀬驅逐隊の不知火、及び鈴木驅逐隊の朝潮は、附近より猛射せられ、共に一彈を受けて、一時危殆に陥りしも、幸にして遂に無事なることを得たり

午後四時四十分の頃に至り敵は北方に血路を開くを斷念せしにや、漸次南方に向つて遁走するもの、如く、依て我主隊は、裝甲巡洋艦隊を先頭とし、之を追撃せしが少時にして遂に敵影を煙霧の中に失し、南下すること約八海里、行く／＼我右方に

離散彷徨せる敵の二等巡洋艦以下、特務艦船等を緩射し、午後五時三十分、主戦艦隊は再び針路を北方に執りて、敵の主力を索め、裝甲巡洋艦隊は南西方に折れて、敵の巡洋艦に迫り、爾後日没に至るまで、此兩戦隊は分離して、各別の行動を執り又相見る能はざりし

主戦艦隊は午後五時四十分頃、其左方近距離に在りし、敵の特務艦ウラルに一撃を加へて、直に之を撃沈し、尙ほ北方を索敵し、進航せる際左舷艦首に當り、敵主力の殘艦約六隻の一群が北東に向ひ、遁走しつゝあるを發見し、直に近づきて之れと並航戦を再始し、漸次敵の前方に出で、其先頭を撃壓せしかば、敵は初め北東の針路を探りしも、次第に西方に屈折し、遂には北西に向針するに至れり、此並航戦は、午後六時より日没迄連続し、敵は大破の餘其砲力減少せるに反し、我沈着なる射撃は、益々其威力を逞くし、アレキサンドル三世と見えたる敵艦は、早く列外に出で、後方に落伍し、先頭に占位せしポロヂノ型戦艦は

午後六時四十分頃より大火災を起し、七時二十三分に至り、俄然爆烟に包まれて、
 瞬時に沈没せり、蓋し火災の彈藥庫に及びしならんか、又當時南方に在て、敵の巡
 洋艦隊を北方に追撃しつゝありし、裝甲巡洋艦隊の諸艦は、已に傾斜して進退自在
 ならざる、ボロヂノ型戦艦一隻が、午後七時七分敵艦ナヒモフの側に來り、遂に顛
 覆沈没せるを目撃せり、後日捕虜の言に依り、之れ即ちアレキサンドル三世にして
 主戦艦隊の見たるものは、ボロヂノなりしを知を得たり
 此時夕陽已に暮き、我が驅逐隊、水雷艇隊は、東南北の三面より、漸次に敵に迫り
 已に襲撃準備の姿勢を執れるを以て、主戦艦隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて、
 日没(午後七時二十八分)と共に、東方に變針し、同時に本職は龍田をして、全軍北
 航して、明朝鬱陵島に集合すべしと傳令せしめ、茲に當日の晝戰を結了せり
 *

午後二時戰團開始の令下に、出羽、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷戦隊は、何れも我主
 力艦隊と分離し、敵を左舷に見て、反航南下し、豫定戰策に準して、敵の後尾に占
 位せる特務部隊及びオレグ、アウロラ、スウイトラナ、アルマーズ、ドミトリド
 ンスコイ、ウラジミル、モノマフ等の巡洋艦等を脅威迫撃せり
 出羽、瓜生戦隊は、終始共同連繫して、午後二時四十五分より、先づ敵の巡洋艦隊
 に對して、反航戦を開始し、漸次敵の後尾を旋撃して、某右方に出で、更に並航戦
 を試み、爾後優速力を利用し、機宜我正面を變じて、或は敵の左に顯はれ、又は其
 右に廻はり、攻撃を持續すること約三十分にして、敵の後方部隊は、漸次に動搖潰
 亂し、其特務艦船の如きは、遂に左往右往して、爲す所を知らざるの情態に陥れり
 此間午後三時過ぐるの頃、アウロラと見えたる敵艦、單獨敵中より突進し來りしも
 我が猛射に多犬の損傷を負ふて、撃退せられ、又午後三時四十分頃、突撃し來りた
 る敵の驅逐艦三隻も、爲す所なくして撃攘せられたり

出羽、瓜生戦隊協力攻撃の効果は、午後四時の交に及んで、著しく發展し、敵の後方部隊は、全く潰亂して、個々分裂し、其諸艦船皆多少の損害を受けたるもの、如く、特務艦船中には、既に操縦の自在を缺くものあるを見るに至れり

瓜生戦隊は、午後四時二十分頃、三橋二煙突を有する敵の特務艦船一隻（或はアナジールならんか）一方に孤立するを認め、直に近て之を撃沈し、尋で四橋一煙突の特務艦船（或はイルチツシユならんか）を猛射して殆んど之を撃破せり

此頃より巡洋艦隊、東郷戦隊も來り加はり、出羽、瓜生戦隊と協同して、共に潰亂せる敵の巡洋艦及特務艦船を掩撃しつゝありしが、午前四時四十分の比、北方より我が主隊に撃壓せられたる敵の戦艦（或は海防艦）四隻南下し來りて、其の巡洋艦に合力せしかば、瓜生戦隊巡洋艦隊の如きは、少時近距離に於て、之と對戦するの苦境に陥り、孰も多少の損害を受けしも、幸に大ならざることを得たり

是より先き出羽戦隊の旗艦笠置は其左舷炭庫水線下に一彈を蒙りしが、爾來浸水漸

く増加し、其應急修理の爲め、波靜かなる所に行くの止むを得ざるに至り、出羽司令官は自ら笠置、千歳を率ゐ、麾下の他艦は、之を一時瓜生司令官の指揮下に屬せしめ、午後六時油谷灣に赴き、其將旗を千歳に移し、夜に入りて出港北行せしも、笠置は修理に時間を要し、遂に翌日の追撃に参加する能はざりし

又瓜生戦隊の旗艦浪速も、後部水線に敵彈を蒙り爲めに、午後五時十分頃、同戦隊は一時避戦して、其損所の應急修理を爲せり

此時に當り敵は南北兩方面共に、既に全軍潰亂滅裂の悲境に在りしを以て、午後五時三十分の比、裝甲巡洋艦隊が、我主隊と分離して、此の方面に來り、南方より敵の巡洋艦を追撃すると同時に、敵は群を爲して、悉く北方に遁走し、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷戦隊も、共に之を追撃せしが、其途上に於て既に進退の自由を失せる敵の廢艦クニヤージ、スワロフ及工作船カムチャトカを發見し、巡洋艦隊、東郷戦艦は直に其撃滅に轉じて、午後七時十分カムチャトカを撃沈し、尋で巡洋艦隊に隨

伴せる富士本水雷艇隊は、突進してクニヤージ、スワロフを襲撃し、同艦は尙艦尾の小砲一門を以て、最終の抵抗を試みしも、終に我が水雷二發の下に沈没せり、時に午後七時二十分なり、幾もなく此等の諸戦艦は、鬱陵島集合の電令に接し、何れも戦を止めて北東に向針せり

二十七日の夜戦は、晝戦の終結後、直に各驅逐隊及水雷艇隊に依り、猛烈果敢に開始せられたり

此日朝來南西の強風、浪を揚ぐること高く、小艇の縦横大に困難なるを認め、本職が直率せし水雷艇隊の如きは、晝戦開始に先立ち、盡く三浦灣に避泊せし程にて、夕刻に至りて風較々和ぎしも、浪尙ほ静らず、洋中の水雷攻撃は、我れに不利尠からざるの状況なりし、然も各驅逐隊及艇隊は、此一遇の時機を失するを恐れ、皆風

濤を冒して、日没前に來り會し、各先を争うて敵に當り、藤本驅逐隊は北方より、矢島驅逐隊及河瀬艇隊は北東方向より、敵主力の先頭を壓し、吉島驅逐隊は東方より、廣瀬(順太郎)驅逐隊は南東より其後尾に迫り、福田(昌輝)大瀧、近藤(常松)青山、河田の艇隊等は、南方より敵の主力部隊及其左後に併行せる巡洋艦の一群に追尾し、日没の頃次第に三面包圍の形勢を爲せり、敵は此勢威に屈したるにや、日没後倉皇南西に避け、更に東方に變針したるものゝ如く、午後八時十五分、矢島驅逐艇が、第一撃を敵主力艦隊の先頭に加へたるを始として、各驅逐隊水雷艇隊一時に突進して、敵の周圍に蝟集し、午後十一時頃に至る迄、連續激烈なる肉薄襲撃を決定したり、敵は日没より

探照砲火を以て、極力防戦せしも、遂に此攻撃に耐えず、其僚艦相失して、四分五裂の情態となり、各血路を求めて、任意に運動せしかば、我襲撃隊の追躡と共に、爰に一場の大混戦を現出し、少なくとも敵の戦艦シノイベリキ、装甲巡洋艦アドミラ

ルナヒモフ、及モノマフの三隻は、此間我水雷に罹りて、全く其戦闘航海力を失ひ又我軍に於ても、福田艇隊の第六十九號艇(司令艇)青山艇隊の第三十四號艇(司令艇)及、河田艇隊の第三十五號艇の三隻は、襲撃の際敵弾の爲め撃沈せられ、驅逐艦春雨、曉、雷、夕霧並に水雷艇鷲、第六十八號第三十三號艇等は、敵彈又は衝觸等の爲めに、多少の損害を被り、爾後一時戦闘に参加し難く、死傷も又比較的尠しとせず、就中福田、青山及河田艇隊の死傷最も多し、但し沈没水雷艇三隻の乗員は友艇雁、第三十一號及第六十一號艇等に依り、救助收容せられたり

後日捕虜の言を聴くに、當夜水雷攻撃の猛烈なりしは、殆んど言語に絶し、我艦艇連續肉薄し來りしを以て、其應接に暇なく、且其距離餘り近き爲め、備砲俯角の度を過ぎ、照準する能はざりしと云ふ

前記のもの、外、鈴木(貫太郎)驅逐隊及自餘の水雷艇隊は、當夜他方面に索敵せしが、鈴木驅逐隊は二十八日午前二時の比、韓崎の北東約二十七海里の地點にて、敵

艦二隻の北走するを發見して、直に之を襲撃し、其一隻を轟沈せり、後日生存捕虜の言に依れば、轟沈されたる此敵艦は、戦艦ナワリンにして、同艦は兩舷に連續二發宛の水雷命中し、少時にして沈没せりと云ふ、自餘の諸艇隊は、終夜各方面を搜索せしも、終に獲る所なかりし

武男の指揮

二十八日黎明、前日來の濃氣拭ふが如く、主戦艦隊裝甲巡洋艦隊は、既に鬱陵島の南方約二十海里に達し、爾餘の戦隊並に前夜の襲撃を果したる各驅逐隊等も、各航路を異にし、順次後方より集合の途上に在り、午前五時二十分本職は、敵の退路を遮断する爲め、麾下巡洋艦隊を以て、東西に搜索列を張らしめんとする際、後方約六十海里に占位し、北進しつゝありし巡洋艦隊は

早くも敵影を發見して東方に當り、艦隊の煤煙數條あるを警報す、幾何もなく同職

隊は、敵に近づき復た報じて曰く、敵は戦艦四隻（後に至り二隻は、海防艦たるを
 知る）巡洋艦二隻より成り、今北東に向針すと、是れ問はずして殘敵の主力たるや
 瞭なり、此に於て主戦艦隊、装甲巡洋艦隊は、其針路を反轉し、漸次東方に向ひ
 て、敵の前路を扼し、東郷、瓜生戦隊も、亦巡洋艦隊に合して、敵の後方を抑へ、
 午前十時三十分の頃、竹島の南方約十八海里の地點に於て、全く此敵を包圍せり、
 敵は則ち戦艦ニコライ一世、アリヨール、海防艦ケネラル、アドミラル、アブラキ
 シン、アドミラル、セニヤールウキン及び巡洋艦イズムルードの五隻にして、他の一
 隻の巡洋艦は、遙かに南方に後れて、當時其影を失す、固より敗餘の敵艦、已に多
 大の損傷を負へるのみならず、我優勢に抵抗し得べきにあらざれば、主戦艦隊、装
 甲巡洋艦隊が

先づ砲火を開くや、須臾にして敵艦隊司令官子ボカトフ少將は、其部下と共に降意
 を表し、本職は特に其將校以上に帶劍を許して、之を受けたり、然るに敵艦イズム

ルートのみは、降伏に先立ち、其快速力を以て、南方に遁れ、我東郷戦隊に遮られて
 復に東方に走れり、此時油谷灣より歸港したる千歳も、其朝途上に於て、敵の驅逐
 艦一隻を撃沈したる後此地に來り會し、直に轉じてイズムルードに追尾せしが、遂
 に及ばずして、之れを北方に逸せり

是より先き瓜生戦隊が、北航の途上にあるとき、午前七時の頃、西方に一隻の敵影
 を發見し、音羽、新高の一小隊を川島武男の指揮下に、之が撃滅の爲め分派せしが
 同隊は午前九時に至りて、漸く敵に近接し、其敵艦スウェトラナが、一驅逐艦を
 伴へるものなるを知り、益々之を追窮し

戦闘約一時間の後、午前十一時六分、竹邊灣沖に於て、全くスウェトラナを撃沈
 し、尙ほ新高は其時來會したる驅逐艦叢雲と共に、殘れる敵の驅逐艦アイストリー
 を追撃し、午前十一時五十分、終に之を竹邊灣の北方約五海里の無名灣に擱岸破滅
 せしめたり、而して右二敵艦の生存乗員は、我特務艦亞米利加丸及び春日丸に依り

悉く救助收容せられたり

敵の降伏を受けたる聯合艦隊の大部は、爾後尙其地附近に泊漂して、敵艦四隻の捕獲處分に従事しつゝありしが、午後三時頃南方より敵艦アドミラル、ウシヤーコフの來るを發見し、撃手、八雲の一隊は、直に之に向ひ、午前五時過ぎ其南走するを追及して、先づ降伏を勸告せしも、之に應ぜず反て彼より砲火を開きしかば、止を得ず砲撃して、終に之を撃沈し、其生存者約三百餘名を救助收容せり
又驅逐艦漣、陽炎は午後三時三十分の頃、鬱陵島の南西約四十海里に於て、東方より遁走し來る敵の、驅逐艦二隻を發見し、極力之を北西に追蹙し、午後四時四十分追及して、戦闘を開始せしに、敵の後續驅逐艦は、白旗を掲げて降意を表せり依て漣は直に之を捕獲せしに、此驅逐艦は「ビエードウイ」にして、敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將、及其幕僚の移乘し居るを知り、其乗員と共に之を捕虜となせり、尙陽炎は他の驅逐艦を追撃して、午後六時三十分及びしも、終に之を

北方に逸せり、又午後五時頃西方に索敵したる瓜生戰隊及び矢島驅逐隊は、敵艦「ドミトリ、ドンスコイ」の北走するを發見し、之を追尾して午後七時鬱陵島の南約三十海里に至りし頃

恰も好し竹邊灣方向より來會しつゝありし、音羽、新高の一隊並に驅逐艦朝霧、白雲、吹雪等が、既に西方より敵に迫りて、砲撃を開始し、瓜生戰隊と共に、之を挾撃するの好位を制し、左右相待て日没後まで、之を猛撃し、殆んど敵を撃破し得たるも、未だ撃沈するに到らずして、遂に夜に入り其影を失せり

此攻撃中止と共に、吹雪及び矢島驅逐隊等連續之を襲撃し、其効果不明なりしも翌朝に到り「ドミトリ、ドンスコイ」は、鬱陵島の東南岸に漂ひ、遂に沈没したるを發見せり、而して同島に上陸したる其生存者は、春日、吹雪等にて救助收容せられたり

聯合艦隊の大部が、北方追撃の戦果を收むるに汲々たる際、南方前日の戦場に於て

も、亦相應の殘獲ありたり、此日早朝戰場掃除の任務を保持して出發したる特務艦信濃丸、臺南丸及八幡丸は、韓崎の北東約三十海里の地點に於て、敵艦「シンヘベリキー」が、前夜の水雷攻撃に傷き、將さに、沈没せんとするを、發見し、之れが捕獲の手續を了して、其乗員を救助收容せり、而して該艦は午前十一時零五分終に沈没せり、又驅逐艦不知火、特務艦佐渡丸も、午前五時三十分頃、對馬琴崎の東方約五海里に於て、敵艦「アドミラル、ナヒモフ」が沈没に垂とせるに會し、續て又敵艦「ウラジミル、モノマフ」が著く、傾斜して其附近に來るを發見し、孰れも佐渡丸にて、捕獲處分を爲せしが、二艦共に大破して、浸水甚しく遂に其乗員を救助し得たる後ち、午前十時の交、相前後して沈没せり、其時又敵の驅逐艦「グロムキー」も、此附近に來りしが、遽かに北方に遁逃せしを以て、不知火は直に之を追撃して、蔚山沖に至り、午前十一時三十分頃、水雷艇六十三號と協力攻撃し、敵砲の沈黙するに及んで、之を捕獲し其生存乗員を捕虜とせり

該艦も亦大破して遂に午後零時四十三分に沈没したり、其他麾下砲艦特務艦等にて戦後戰場附近の沿岸等を搜索して、救助收容し得たる撃沈敵艦の乗員尠からず、戦利艦五隻の捕虜と合して、其の數殆んど六千に達す以上は五月二十七日より、二十八日午後に亘れる海戦の經過にして、其後當隊の一部は、尙ほ遠く南方に敵を搜索せしも、遂に又隻影を見ず、日本海を通過せんとせし、敵艦隊約三十八隻にして、我撃滅又は捕獲に洩たりと認むるものは、巡洋艦驅逐艦及特務艦各數隻に過ぎず、而して此二日間の戦闘に於て、我艦隊の失ひたる所は、水雷艇三隻のみにして、其他多少の損害を蒙りたるものあるも、一として今後の役務に支障あるものなし、又た死傷は全軍を通じ、將校以下戦死百十六名、負傷五百三十八名にして、其細別は別に報告せるが如し

此對戦に於ける敵の兵力、我と大差あるに非ず、敵の將卒も亦其祖國の爲に極力奮闘したるを認む、然かも我聯合艦隊が克く勝を制して、前記の如き奇績を收め得

たるものは、一に
 天皇陛下の御稜威の致す處にして、固より人爲の能くすべきに非ず、殊に我軍の損
 失死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信仰するの外なく、嚮きに敵
 に對し勇進敢戦したる麾下將卒も、皆な此成果を見たるに及んで、唯感激の極言ふ
 所を知らざるものゝ如し

昔し語り

敵が一縷の望みを囑したりし、波羅的艦隊も哀れや日本海の一戦に敗れてより媾和
 となり、凱旋となりて、さしもに世界の耳目を聳動したりし大戦争も、漸くにして
 茲に已みてける

某艦長として武勳嚇々たる川島武男は滿洲軍總司令部の凱旋に大山大將の護衛艦と
 して大連に入り、亞で上陸しける折り片岡大將は早くも武男の姿を見て

「ヤア武男君、しばらくでした、御無事で御目出度う」何時とて變りなき優しき大
 將の姿は宛然ら大山の動くが如く座るに此方へ進み來りぬ

武男は嬉しく懐かしく、恰かも慈父に遇へるが如き心地して其の恙なきを祝すると
 共に

國家の爲め老軀を提げて、砲煙彈雨の中に、釜中の暑さも凍天の寒さも事とせず二
 年せ餘りの歲月を送り給へる其の勞苦を偲びながら、思へは遙かに十年の昔しに走
 せぬ

當時艦隊の演習に赴く時、逗子に立寄りて暇まを告げしが一生の別離とは知らざ

りき

彼の時別莊の門に送り出で

『早く歸つて頂戴な』

と三度び呼びける浪さんの聲の今も猶ほありくと耳底に残れること、日清の戦役終りて横須賀に赴きし時、逗子に下りて、もしやと、別邸に訪ねし時、已に其の人は在らずして、老爺のみ一人庭先に草を撈りながら

『嬢様は殿様と御一緒に姥さんを御供に京都へ赴き給へり』

と聞きし時のこと、更に南征の途に上るべく東海道列車に乗りて、京に近き

「山科驛」に着きし時、上る汽車、下る汽車、汽車と汽車との擡れ違ひに、圖らず浪子と顔を見合せし時のこと

瀛軍の今しも過ぎむとする時、浪子は狂せる如く窓の外にのび上りて手に持てる董色の手巾を我れに向かつて投げつけたりし時の事

征臺の役終りて、三度び家に歸りし時、浪子は最早此の世の人ならで、縁りも深き青山の土となり居りしこと、墓前に立ち、墓標の下に涙を注ぎし時、後ろに立てる

中將は

無手と吾が手を握り玉へ双眼に涙を浮べて

『武男さん、わたしも辛かつた』

と互ひに手を握りながら涙を絞りし時のこと、漸ありて中將は涙を拂ひつゝ我が肩を敲き給ひて

『浪は死んでも、わたしは矢張りお前の爺じや』

と仰せられし時のこと

種々の思ひは今しも、大將の音容に接すると共に油然として胸に浮び來りぬ

今も昔も變りなき大將は、何事も無頓着のやうに唯だ莞爾やかに、武男の肩を叩きながら

『武男君、是れも十年の昔じや』

或る晩の事俺が副官と二人り連れにて旅順の市街を通つた時、突然の曲物、あは
 や短銃の弾先に此の大きな體が、挫と倒れやうとする危い所を、救つて貰つたが
 今日又た、御國へ歸るので、ゑらい御世話になります、餘つ程深い縁と見え
 ます喃あ……………

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

あゝ夢か……………夢か……………十年の昔、思へば唯一匪の夢なりき、而ふして幾度か死
 を決せし我れ……………幸か不幸か死神に見捨られて、又も憂き世に残されたり、噫々
 『残る武男』我れは遂に我が一生を涙に送るべき乎
 涙の多き武男は、確と大將の手を握り

「閣下……………」

と云ひしまゝ、暫し無言なりき

武勳の光り

千古の名將 東郷大將が聯合艦隊を率ひて凱旋を帝都に奏するに先だち、舳舻相銜
 みて整々伊勢灣に入り部下と共に神恩の辱なきを奉謝せんがために
 大將は旗艦敷島に座乗し、富士朝日の二戦艦を率ゐ、上村中將は出雲に座乗し常磐
 淺間、千早の三艦を率ゐ十月十三日を以て伊勢灣に入り、津市海岸を距ること二里
 の沖に碇泊したり
 翌朝に至り、龍田及び假裝巡洋艦熊野丸、滿洲丸も來り會し出羽中將は滿洲丸に座
 乗す、又た片岡中將は八雲に座乗し日進、春日の二艦を率ゐ、青森を抜錨して伊勢
 灣に向ひ十五日午後一時頃先着各艦隊は隣りて投錨す
 斯くて我が艦隊は殆んど此處に集まりて各將校下士等は陸續上陸を始めたり
 されば津市に於ては豫てより聯合艦隊歓迎の企てありて數日來より其の準備に忙は

しく市民は勿論、近縣各地の人民は東郷大將以下各將校の英姿に接せんとて續々入り込み來るあり

歌に詩に小説に世にも名高き海軍中佐川島武男の優しき姿を見んが爲に我れもくと集ふありて、市中は殆んど人を以て填充せられたり大將以下は歓迎會に臨み翌日は市長の先導にて阿漕に出で宇治山田に着して神宮に参拜せり

殊に最も敬神の聞之ある大將が其赫々たる武勳を完うして、茲に芽出度く凱旋し勅命に依り皇祖の御廟前に於て皇尊の神徳を謝し併せて誠忠無二なる帝國軍人の爲めに將來益々武運長久ならん事を祈りける

折りから少雨霏々として降り、神路山の影は薄く籠められて、大將の後へに整列直立せる幾多將官の衣帽に落ちかゝる杉の下露は神の涙とも仰がれたりき
廳て神宮参拜の儀を終りたる聯合艦隊は十九日午後三時を以て伊勢灣を出發し船隻相啣みて東京灣に向ひたり

即ち東郷大將の旗艦敷島先づ錨を揚げ之れに次で富士、朝日

上村中將の旗艦出雲、常盤、片岡中將の旗艦八雲、吾妻、日進、春日の序列にて伊勢灣を出發し通報艦千早及び龍田は列外に在りて並進せり

各艦の間隔は四百米突、各艦隊の距離は、一千米突とし、一列單縦陣を爲して全長實に一里餘、時に細雨空濛、やゝ展望を缺くと雖も、威容極めて堂々たり

伊勢灣を出るの時、日漸くに暮たり、此時千早、龍田も亦別に入りて一隊となりぬ雨は益々降り頻れども遠洲灘の風波は極めて靜穩なり各艦の舷燈或は青、或は紅、高低参差として壯觀云ふ可からず

二十日午前六時劔崎の燈臺下を過ぎ觀音崎を廻りて東京灣に入る
之れより先き伊勢灣を抜錨したる盤手も亦た此時來り會し、又た竹敷を發したる瓜生戦隊の各艦は夜來既に横須賀港外に繫泊して東京灣内の壯觀に一段の光彩を加へたり

斯て午前八時過る頃より艦隊は右に在りに航路を轉じて漸く横濱港外に近づき、半速より、微速となり幾程もなく、至艦隊を擧げて一齊に投錨を行ひ、豫定の錨地に碇泊して將に行はれんとする世界空前の大觀艦式に列せんとするものなり

觀艦式終りて後の川島武男、上野公園に催ふされし東京市の歡迎會に臨み、歸途母を訪ひ、更に菊島家を訪ふて吊詞を述べ懇に駒子を慰めて青山に向へり

墓 前 の 武 男

青山墓地なる浪子の墓に、一枝の花を手向けて懇ろに、其の亡き魂を吊ひつゝある川島武男なり、しばし合掌せる後ち
恰かも生ける人に物云ふが如く

『浪さんの墓に別れを告げて迥か戦地に出發してより早くも二年になりました、出發の際は生て再び歸らじと契りしが、今日しも故郷へ歸つて、再び浪さんの御墓に花を手向けるようになったのも

思ひば皆んな、浪さんの御蔭である
僕は巖に、浪さんの御墓に、別れを告げて直ぐ様軍艦に乗り組み、仁川の海戦に、浪さんも知てる彼の白石君と共に敵艦を撃沈してより、旅順港の閉塞に加りました

が、死を決した身が此處にも死に切れず
却て、前途、御國のため我が海軍のために力となるべき、廣瀬武夫君と、白石君は前後して名譽の戦死遂げられました
兄弟の如く親しみし二人の戦友に別れて『殘る武男』が其の時の心は千裂れるばかりでありました

其の日の戦ひ終りて後ち波み靜かなりし海上の夜、旅順の山の端より差し出る

月をながめて、つくづくと此の世の味氣なきを考へて居ますと
 想は直ぐに十年前の昔に走せて、彼の廣瀬君と一緒に、横須賀より、東京へ歸
 る途すがら逗子の別邸に立ち寄りし時、浪さんが山のように出した風月の唐饅
 頭を奇麗に平げ御代りを請求して、姥に笑れたことなど、胸に浮ぶと共に、浪
 さんの面影や廣瀬君の面影がありありと現はれて、果は一層の悲みとなり、來
 るべき、海戦には、廣瀬君や、白石君に劣らぬ戦功を立て花々しき戦死を遂げ
 戀しい浪さんや、懐しい戦友の側へ行いて苦の世界なる此の世を遠ざけようと
 思ひました

待てば海路の日和も、月かさなりて、黄海の激戦となりましたから我が身の死
 ぬべき時は今ぞ今と……覺悟して心のまゝに敵艦を惱まして居ますと、何處
 よりか飛び來し敵弾の破片に胸を打たれて、今ぞ本望なりと倒れしまゝ、少時
 樂天の人となつて居ましたが

又た人聲に呼び戻されて此の世に歸つて來ますと、不思議にも胸には些しの怪
 我もなくして脚に二ヶ所の傷を受けたのみでありました現在、倒れたのも胸を
 打たれた爲めであるに此のまゝ無事なるとは如何にも不思議でならぬと思つて
 よくしらべて見ると、始めて分りました

夫れは、十年の昔し、日清戦争の折り、之れも矢張り黄海の海戦に傷いて佐世
 保に入院して居た時に、浪さんより贈られた

豊川稻荷の守りを肌身につけて居つたからでありました、もとより神のお力で
 はありますが又た、浪さんが僕を愛し、浪さんの魂が僕の影身に添うて、僕の
 身體を守護つて破下れたと云ふことを悟りました

而し無事に残つて、斯ふして、浪さんの御墓の前に立て、昔しのことを思ひ出
 しては、悲みの涙に袖を絞りながら、御禮を述べるよりも

彼の時潔く戦死して了つて、此の御墓の下に安らかに眠つて居る、浪さんの

御側へ行って十年以來、樂しからぬ、苦の世界に残つて人知らぬ、涙の裡に月日を送り來し僕の心を物語りして、戀しい、浪さんより一言の慰藉を受けたならば、助かつて斯ふして無事にあるよりも、より何程か嬉しかつたでありませう

『殘る武男』は此の先き生命のあらん限り、日清戦争を思ふ毎に、日露戦争を思ふ毎に、助かりし生命を思ふ毎に、浪さんの心づくしを思ひ出して一生を涙に送らなければなりません、而し僕の影身に添ふて斯く迄に僕を守つて被下る浪さんの心づくしに酬ゆるには飽迄御國の爲となり、我が海軍に盡して、浪さんの親切に答へ一生を天に任せることとしませう……

果は唇顫ひ、涙に胸せまりて、物云ふ不能す、唯『片岡浪子之墓』と書せる一基の石碑を眺めて其身も石の如く動かざること良久しかりき

* * * * *

美人の煩悶

長火鉢の後には二挺の三味線を掛けたり、總桐の開き戸付きし、三重箆筒の上には白木の神棚に二個の燈明晃々と輝きて見るからに、神々しく、何々の守護何々の祈禱、何々神社と書せる多數の札は此處に納りて祀られたり

紫檀の茶棚に同じ茶盆、薩摩焼の茶器を並べ、此方には是も唐木の煙草盆、其の傍には寄木細工の煙草入れあり、長羅宇の煙管、斜めに横はりて主待つものゝ如きを見向きもやらず腮先を襟に深く突き込みしまゝ

何事か案ずるが如く惜むが如く、時折り嬉しげなる笑ひを漏すかと思ひば又た沈みつゝあるは之れぞ中村屋の榮二なり

「あゝ惜しいことした現在の彼の方に、御目に掛りながら……」

何うして、妾は、物云ふことが出来なかつたかしら、御座敷へ出た時は、伊藤

様でも、桂さんでも、曾根さんでも、護摸人形か瓢箪のように思つて、ざれ口も利いて居るのに……否々夫れとは場所が違ふ人が違ふ、御酒さい召し上り玉はぬ堅いお方に、何うして無暗に

そして彼の凛々しい犯し難いお姿……何時ぞや、君ちゃんも云ふた通り自分が戀しいと思ふお方には、心に思つた十分の一も物云ふことが出来ぬさうじやが、ソリヤ本當のことである

わたしは、十の一つ所か、一言も云ふことの出来ずにしまつたのは惜いことしたデモ御參詣が、すんで此方へお向の折り後に立てる、妾か彼の方の御顔を見てハツと思ふ拍子に……妾を……それとも心の迷であつたかしら

何にしる唯た一度御目にかゝつた切り別にはぞと云ふ御話を申したこともないのにヨシ御見知りあるとしても何で御言葉をかけて被下るものか、是れが本當に、磯の鮑の片思ひであらふ……あゝ世の中に心の通らぬ片戀程つらいものは無い

と種々に思ひ腦めるなり

時しも向ふ側なる、藤本の二階より

枯れほそる、枯れほそる、冬の野原の虫の聲誰れにこがれて啼くぢややら、

更けるに寒むき一人寝や、君に心を置く霜のとけぬ、一ト夜がうらめしい

端歌の聲を聞くともなしに、耳傾けてありしが今度は、半玉が、さらいの聲として

『其方は思ひ切る氣でも、わしや、何んばでも、ねーきらぬ、餘り逢ひたさ、なつかしさ、勿體ない事ながら、觀音様をかこつけて、逢ひに北やら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ、二人一所に添ふたなら、飯も焚ふし、織つむぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと、思ふもの

女の道に背けとは、聞へぬわいの胸慾と、恨みのたけを友禪の、振の快に北雨晴れ間は更になかりけり』

え、野崎か……當てこすりな……人を馬鹿にして

と、つまらぬ事を氣にして、自暴氣味になるは此の社會の常なり、されど榮二は其の性の温順なるたけ何事も口に出して云ふよりは、思ひに沈むことのみぞ多かりき

斯は榮二が意中の人として慕ひつゝある川島武男が青山墓地なる浪子の墓に詣ふて更に、豊川稻荷に参詣せる折り、圖らず榮二も此處に來りて、武男の後に立てるなり

彼れは海軍士官の軍服に胸を轟かして、もしやと計り其の誰れなるを知らんとする折り、士官の参拜了りて此方へ振り向く其人を見て驚きけるなりハツと計りに云はんとして云ふ不能唯々嬉しげに見上げし眼元、サツと散る顔の紅葉を消すよしもなく茫然其姿を見送るのみ、遂に彼れが戀は、あはれ片戀に終りしなり

家に歸りて彼れは泣けり……何故に我れは其人に遇ひながら、例令一言なりと言ふを得ざりしぞ云ふべき事は幾許もありしなり、殊に佐世保の病院より我が身に賜

はりし御書狀の御禮、責めて是れたげなりとも、申上ぐべきに……あゝ何故に我れは言ふを得ざりしぞ

否々自然に任せよ……云はれ却て悪かりしならむ、去りとして斯る機會は再びあるや、いなや、と煩悶の中に一日を送りぬ

澎湖沖の慘事

戦雲漸く治まりてより春は三度び重なりて爰に明治四十一年となりぬ花既に散りて初夏の綠愈々深からんとする時、一大悲報は片岡大將邸に傳へられたり

「軍艦松島の爆沈、大將令息の奇禍」

片岡大將令息は少尉候補生として松島にあり松島は日清戦役の當時、川島武男の乗

組めるものなり

松島爆沈の電報は直ちに號外によりて四方に傳はり次で翌日の新聞には爆沈當時の光景を掲げられたり、そは

四月二十七日、マニラより澎湖島に廻航して馬公要港に入港せる我が練習艦隊、松島、嚴島、橋立、の三艦は多くの士官候補生を乗せて遠洋航海に趣き將に其の任を終らんとして臺灣に廻航し、馬公灣内の水深約八尋の處に碇泊せり
各艦の距離は約四百メートルにして松島は其の中央に在りしが三十日午前四時八分轟然として爆發せり時しも午前の四時なりき、番兵、中島水兵は一種の臭氣を感ずると共に稀薄なる煙を認めたれば早速番兵伍長、當直將校當直候補生に通報したるに一同は火藥庫に異狀あるにはあらずやとて降り行き中島水兵は前部甲板に行かんとして

五番砲側に至りたる際強激なる震動を感じ同時に爆發せし火藥瓦斯の爲め卒倒したるも辛うして腹這になりて上甲板に出し頃は海水既に上甲板に充ちて右舷より浸水し始めたり

此の刹那他の水兵は上甲板に走り出で漸く端艇を引卸し中島水兵と共に嚴島に漕ぎ附けて急變を報告し、更に松島に引返せし時は、艦體既に影を水中に没したり此の通報に接したる橋立、嚴島の二艦は僅に微震を感じけるも斯る變事のあらんとは夢にも知らでありけるが、夫れと聞くや否な直ちに探海燈を照射して端艇を卸し、遭難者收容に着手せしが、時に曉霧四隣を罩め、雨又た之に加はりしたため救助作業に困難したり而して艦内の寢室にありし將校及び候補生の生存せるもの一名もなく只、折田中軍醫、平林大尉、村松機關大尉のみ生存せり、中甲板水兵の多くは救助されしが开は總て前艦部のものにして

是等は艦體震動のため釣床より刎ね落され目を醒して飛び起きし頃は既に海水と

火藥瓦斯とは後艦部より襲ひ來りて殆んど卒倒せん計りとなり浸水早くも首に達し其の心附し者は口に手拭を咬へて艦窓より水を潜りて逃れ出でたるが多數ありし爲め出で得ずして後れたる水兵は苦しき聲を上げて萬歳を唱へ其の聲斷續して再三に及びし間も無く渦巻く波間に没し去りしが

松島が始めて爆發し次で海底に落ちる迄の時間僅かに五分を出でず、馬公要港部に於ては初め何等の音響をも聞かず

只だ陸上衛兵が天明に至りて、松島の影の見えざるより其の沈没を知り直ちに之を要港部に報告せしより救助に着手せしなり

艦長矢代大佐は頭部に二個所の傷あり死體の傷無き者は總て溺死せるものなり死體は直に火葬に附し遺髪、遺骨は五寸五分の箱に收容し馬公要港水交社に祭壇を設けて矢代艦長の遺骨を中央其他を左右に安置し續いて發見せる死體は火葬に附して遺骨の整理に従事する光景は轉た慘憺たり

飛報に接せる片岡大將は、暗然として暫し聲さいなかりしが、何有に毅一計りじやない、乗組は皆な御國のために死んだのじや、殊に海軍は艦底一つが奈落と云つて斯んなことは有り勝ちのことじや

と態と平氣を装い玉へと、其の心の裡は如何あるべきぞ

曩には最愛の浪子嬢に別れ、續て愛婿菊島少尉の戦死を吊ひ、今又た我が家の嗣子たる毅一氏の漕難に接し玉ふ思へば誰れか又大將の心事に同情せざるものあらむや

浪子の死を見て泣かざりし片岡夫人、駒子が其良人菊島少尉の白骨に接して、泣き崩れける時にも一滴の涙も見せ給はざりし夫人は、毅一氏の漕難によりて初めて涙を見せ給へり、流石に血を分けたる母の情として斯くあるべしとは、女中部屋に於ける種々の噂に交りて聞えたるなり

川島武男と、軍艦松島とは其の縁因頗る深かりき、武男が江田島を出て、遠洋航海の後ち少尉に任命せられてより以來、松島を我が家とし我が母とも思へるなり而して日清の役、黄海に傷きて、佐世保の病院に入りてより脚部に殘る創痕の紀念につれて松島に對する感念は愈々深く宛ら留學生が其の故郷を思が如くなりき然るに突如として此の縁因深き、母艦の爆沈と共に、我が最愛の妻たりし浪子の異母弟たる毅一が候補生として殉難せるを聞けり

十有餘年の昔し、白菊の花を手向けて浪子の墓前に合掌しける時

「ヤア川島の兄さんが

と可愛き聲に我れを驚かせし水兵服の少年が早くも候補生となり、花是より開きて芳香將さに匂はんとするの身を以て、あはれや、艦に殉せるかと思へば今更ながら人生の如露如電に袖絞りつゝ聽て殉難者の幽魂を送るべく其の葬儀に列しける

嗟呀幽魂又た幽魂

朝まだき曇れる天は晴れたれど遺族の胸を鎖せる愁の雲は霽れやらず、水交社の後庭に設けられたる祭壇の正面に並べる四十五の靈棺は悉く黒布を以て蔽はれ、其の左右には、司令官及よび各軍艦より贈りたる花環の外、更に各宮殿下より賜りたる榊あり、午前十時悲げなる奏樂の間に着席せる遺族の涙は再び新なるを見受けられたり

斯くて艦長たりし矢代大佐令息、大山元帥、片岡大將以下各喪主の禮拜ありしが、人に抱かれたる幼き令息、令嬢、或は白無垢に下げ髪の若き未亡人が泣き腫せる眼を俯向きて祭壇に進む様などは最も人の心を動かすものあり

午後零時、靈柩は砲車に移りて水交社を出、肅として青山の齋場に着しぬ

夏の光、頭上に爛として、哀の譜は乾空に消えんとしつゝかすれて、切々嘈々と連續するも涙ならざるはなし

天幕掛の祭壇に安置されたる英靈に向つて各宮殿下の御代拜あり續いて喪主親縁の人々及び會葬者一同涙と共に玉串を捧げて式將に終らんとせり

打ち見るからに遺族親族席に着したる人々は何れも哀傷悲嘆の情を表はして千萬無量の感慨に暮れざるものなかりし中にも

出産後間もなき矢代艦長の夫人が白無垢の小袖に白綸子の帯結び締め、下げ髪したる扮装にて頭是なき二人の遺子を引連れて、しとやかに控へたると、正装せる大山

元帥に並びて片岡大將が令夫人と共に悄然として控へたると、涙にもろき川島武男が無量の感に沈めるあり其の他遭難者の祖父母と覺しき翁媪の頻りに目をしばた

けるあり、或は兄弟姉妹と覺しきが悲みの涙に暮るゝが如き何れも人を泣しむるの種とはなりてけり

想ふに武人の生涯に於て死は最も輝ける榮譽なるべし然り死は元より武人の期する處にして唯死所を得るにあるのみ、國命をこれ重しとし、死生を鴻毛よりも輕んじ萬死の境に入りて欣然王事に斃る

其の忠烈千載の下、尙凜然として生氣あるべく史乘に活躍せる武人の本領これにくものなしとは云へど

一朝不時の災變に斃れし、我が松島艦殉難者の如きは痛恨の極致たるべきものと云はざるべからず

夫れ九魂六魄の恨事幾何ぞや、遺族の痛惜を思ふも涙なり、あはれ祭壇の左方に在りて涙に袖を絞れる幾多の遺族を見たる

川島武男は人生最高の哀史を眼前に展べたる心地して暗愁の面に上るを禁する能はざりき殊に當時六歳なる徳田副長の遺子豊秋氏が、長野大尉に抱かれつゝ、玉串を捧げしを見るや

濛い濛いし武男は、暗愁の情一入に強く果ては玉なす涙の雨をハラ／＼と其の膝の上に落しける

豊子夫人

豊に男爵夫人を望みて遂げず、次に高等官の奥様とならんとして事破れ、再び男爵家を覗ふて遂に全くの失敗に終りし、山木の娘豊子は
 飽迄も媒介料にあり付かんとして彼處此地に奔走せる山口磯太の運動によりて
 湯島の佛御前として世に知られし高島商會の二男民三と目出度く華燭の典を擧げ
 一月餘り平塚の別邸に在りしが其後築地の小田原町に別居して築地様と稱されしも
 そは表面の尊稱にて
 影へ廻りては揃へも揃つた似たもの夫婦よと噂のみ高くなりぬ
 『あの………築地の小指を知つてるの？』

『知つてるよ………あの、ケチン坊を』

『は／＼／＼、色が白くて眉が濃くて頭髮の毛の房々した處は、實に申分の無い絶世の美人だが惜いことには………』

『惜いことには、腎？』

『はは／＼／＼………さう／＼腎も腎だが………ケチで愛嬌の無いことよ………』
 『ソリヤ、似たもの夫婦で、それでこそ仲よく鴛鴦のように離れつこなしに追い廻してゐるんだ、彼れが若し湯島の型に行たら、矢つ張り夫婦別居論が持ち上つて一方が妾宅廻りをすれば、一方は、役者を買ふやら、そんちよ其處らの坊主に入れ上げるやら、俾の定紋迄で替へて、豊臣天下の淀君公が出来るわけだ、何しろ成り上りの山木と成り上りの高島、親と親とは、偉いに違いないが忤と娘は些とも、偉らからんよ………昨宵もねえ彼の風の吹くのに十一時過ぎに湯島から築地、くんだりへ走らせて、御定まりの五十錢の外は一文の心付けなしとは驚き申すぢや』

……それも例の、ハゲ頭に、は代を引かれると一杯も満足に飲めんぢやないか
ダカラ今朝も、勝公がブツ／＼云ひながら

馬鹿にしてらあ、何うせ唯なら、按摩さんを送つた方が餘つ程、氣が利いてる、
と膨れて居たが、香水のおしろいのと、金に困らぬ小間物屋へ馬鹿なお金を棄
ても、下々の者へ棄て、悦ばせる心無いのは、幾ら大きな身代に成り上がつて
も育つた畑の山木流が抜けぬと見えるが

兎に角彼のお豊さんも幸福だ、御用商人と來てるから、泡吹く錢はドシ／＼這入
つて來るし對手の良主は些と御目出度の甘ちやんだから、何うも勝手な我が儘が
出來るわ

彼の時もし川島家へ行て居つたならば、それこそ大變だ、何して彼の嚴格な入釜
敷い川島の隠居が、無事に置くものか……シテ見ると人間は身分相應な事を望
まなければならぬエ、柄にも無い蛙の子が、華族の奥さんにならうとしたつて

さう安々と出來るもんか

町人は町人同士で暮しながら、時折り善光寺參詣の牛のように引き摺つて歩けば
それで御役は済んでるから、世の中は御目度いものである……

これは高島家に程近き、湯屋の流し場に於て飾りなき裸體其の儘の噂にてありき

武男の遠征

年は又も三度び變りて明治四十三年となれり、其年十月十五日、我が帝國の新造大
戰艦河内の進水式に列しける、川島武男は特別の任務を帯びて、翌十六日横須賀軍
港を解纜したる、淺間、笠置の練習艦隊に加り、屋城少將指揮の下に南米指して將
に一萬七千餘哩の航程に上らんとしつゝあり

二艦は何れも淡灰色に塗り替へ艦尾に掲げられたる軍艦旗は橋頭高く翻る淺間の長官旗と共に清風に偏翻として勇しきこと云はむ方なし

之れより先、屋代長官は見送人の迎接に忙はしく横須賀海兵團長は此の名譽の艦隊見送りの爲め特に軍樂隊を編成して港務部の汽船に乗組ましめ、水雷團長は亦た警備艇を準備して兩艦乗組員家族の爲めに用意せられたる汽艇と共に棧橋に繋留され逸見水ヶ浦にも亦た見送人の乗用として汽船、汽艇の準備せられたるあれば、兩艦出發前の港内は船艇の往來織るが如くにして其の目腥しきこと譬ふるに物なし

されば乗組の士官水兵等は今少時にして身は萬里の航程に上ることをも打ち忘れたるが如く、艦内至る所春の如くに賑かなり
斯くて旗艦淺間の艦上見送り人と乗組員との間に濫かき交騷ありて一同退艦し終るや出港準備の號笛港内に響き亘り艦員東西に奔走し、やがて淺間先づ動き、續いて笠置徐ろに進行し始め、在港の諸艦よりは

「安全なる航海を祈る」

の信號を受け各艦登舷禮式の間を兩艦四百米突の間隔を保ちつゝ勇ましく出港なし
てける

航海中

於ホノルルに 川 島 武 男

今日は故國を離れて早くも三日目と相成り候

横須賀出港の日は彼れ是れと忙がしく取り込み居り候ふ事とて何事もなり申さず、昨日はまた神嘗祭の休日にて、漸く今日より落付き候に

波も大分収まり、艦の動搖も少なく天氣も好し誠に心地よく相成候と共に三日間の航海にて艦は大分南の方に参り候ため、氣候も大に暑く、横須賀を出る

時は冬装束の黒服、日本式なれば袷せに羽織と云ふ扮装なりしも今日となりては、到底も暑さに遣り切れ不申苦みをり候處へ
 夏服に着替へと云ふ號令に接して漸く身輕と相成候
 思えば八月の末、東京の友人より

今年は洪水の災厄に遇ひ蟲干を二度致すこと、相成候、二度干しても心の蟲だけは容易に死に兼ねるもの有之候云々

と便りのありし時に何となく妙な心持致し候得しが今度は此方より一度夏を迎へて夏を送り今又た航海中に夏を迎ふること、相成候と申送るが如き仕儀となり候事如何にもおかしく候

只今の所我れ等の眼に入るものは、海と空と勇ましき、淺間と笠置の二艦のみ翠巒もなければ、綠蔭もなく、優しき蟬の聲さへも聞き不申候
 昨夜は殊に空晴れて月も明らかに候まゝ甲板に浮れ出で、

東海大魚躍怒濤

屠之壯士用何物

笑取匣中日本刀

客窓壯夢屠鯨夢

一片丹心秋月高

滿胸慷慨君知否

と先傑の作を味ひ居り候處へ背後より突然に

『二本目の扇を、おろす暑さ哉』
 と洒落出されて吃驚致し候呵々

萬雷響處方波高

笑取匣中日本刀

神州男子氣何豪

一片丹心秋月高

義如山獄死鴻毛

東海大魚躍怒濤

* * * * *

航海音信

磨きえて國の寶となるものは、人の心の玉にぞありけり』とは月照師の詠れしものに候が小生は十有餘年の昔し初めて江田島を出で、遠洋航海に就し時と、今回の航海とによりて、大いに、磨きえて國の寶となるものは、の眞味を悟り申候

扱て御承知の通り艦は女性の諭の如く人の前に出で候には一通りのお化粧を要し候こととして昨日は乗組員半日かゝりにて長き旅路に汚れたる淺間笠置の姿を繕ひ候

人に譬へ候得ば、顔や手足を洗つたり、紅や白粉をつけたりする様に艦も舷側や甲板やらを洗ひ金物の錆たる所へは磨きをかけたり、新しき塗具を塗りなどして人に見られ條ても餘り見苦しからぬ支度は出来上り候

扱て今日は待ちに待ち居し、航海中第一の寄港地たる布哇のホノル、港に着く可き日に候て乗組の將士より給仕の下に至るまで皆心に希望あることに候得ば氣も自から引立ちて四海極めて明らかに見ゆるような心地致し候
やがて尾和布島が迥かの波上に見え初め候てよりは誰れも彼れも何となく、氣がソワソワする様になり事業の休みときなどに時々上甲板や艦橋甲板に上りて前方を眺め候に

岸の方は次第に淺く相成居り候と見え水色自から沖の水面とは相違して妙に青く相ひ見え、其の上を靜かなる白波が寄せては返しつゝ洗ふが如き様手に取るように御座候
午前七時に愈々ホノル、港外に着き不圖彼方を眺め候得ば、我が艦隊歡迎のためには數十隻の漁船が折りからの狂瀾怒濤を物ともせず紅白様々の旗を立て連ね丁度軍艦や漁船が滿艦飾を施せしが如くに飾り立て候て我が艦隊の四方を圍み

ながら

帽子を振るやら、旗を振るやらして大に歓迎の意を表しくれ候

故郷の山を後に見てより明けても暮れても海上の眺めに飽き果し身は久し振りにて而も知らぬ他郷に於て艦の乗り組み以外に

我が同胞の歡ぶ顔を見候こと、實に云ふに云はれぬ嬉しき心地致し候、海岸には歡迎見物の人々群集し出迎の漁船は宛然母を慕ふ小兒のように軍艦の近傍に付き來り、我れも喜び彼れも歡びつゝある折しも霹靂一聲天空に響くと見ればこは即ち海岸に打ち上げたる歡迎の花火に候て日米兩國の國旗が大空に翻々たるを仰きつゝ緑したる布哇の港に上陸仕り候

遙かに想ひば我が都の空は秋の盛りに候て、庭には黃菊白菊咲き初め申すべく王子の瀧の川、目黒の栗飯、隅田の端艇など、夫れくゝに浮るゝ人も有之べく座に故山の面影を偲び居候 先は着港のあらまし御報知せ迄に匆々

* * * * *

領事館留置の御書狀正に拜見仕り貴家の御安泰を拜承すると共に、赤阪なる片岡閣下の御變りなき御消息をも耳にし嬉しき事に御座候殊に今日は、十一月三日

天長節の日出度き日に候て旭日朗らかに波に映じ、和風徐ろに綠葉樹を動かしつつ今日の佳辰を祝する様に見え候

午前八時に軍艦旗を掲げると同時に淺間は先づ滿艦飾を施し候に笠置もすぐに行ひ候て殊の外見榮ゑる様に覺え候、八時十五分艦員一同上甲板に分隊點檢の位置に整列して悉く東京の方に向ひ波を越ゆる三千哩

異郷の地より遙に聖壽の無疆を祝ひ奉り候、然して 惟るに我が國運の隆昌と國勢の發展とは宇内萬邦の仰視する所に候て殊に

本年は韓國を併せて東洋の盟主たる基礎を固うし前途の光明赫々として中天に向ふ旭日の勢是れ偏に

今上陛下威五登三の徳を具へさせ給ひ列聖三千載の丕績を承けて帝國億萬年の皇謀を定め給ひ以て普く三天兩地の化を敷給ふの果に外ならず候

その功烈四表に光被し威徳上下に格り陛下御稜威の隆なること萬古無比と申し奉るべく、吾等此の昭代の恩澤に霑ひ、常に皇恩の宏大なるを思ふて微忠唯

君國の爲に身命を献せん事を願ふのみに候

今日此の佳辰に當り欣喜殆んと措く所を知り不甲三千哩外遙かに 聖壽萬歳を祈り奉り候

さて遙拜式終り候てより司令官を始め下土以上一同は逐次兩陛下並びに皇太子殿下の御眞影を拜し奉り、それより休業と相成正午には淺間と笠置の兩艦より一齋に二十一發の皇禮砲を打ち候に、ホノルル鎮守府よりも同數の禮砲にて祝

意を表し、段々たる響きは穹窿の内に消えて更に永却の平和を殘し我が帝國の基礎は益々固きを加へしに相違無之候、何れ後便には觀光の模様等申上べく候も先は是にて筆止め候也

以上は川島武男が、航海先より東京の親しき知人に送りし書信の一節にして、其の一身を包める種々なる煩悶は總て此の壯快なる航海によりて、胸邊拭ぶが如くに消え去りしなり

日出度き歸朝

去歲の秋、未來の海將たるべき少尉候補生を乗せて、横須賀灣頭、萬歳聲裡に送れ

ながら戀しき故郷の山影を後に見て遠洋航海に上りしより、月を閲すること五ヶ月一萬七十餘哩の航程を無事に終りて、花笑ふ三月六日の午前九時、淺間、笠置の二艦は威容堂々、穩かなる海波を蹴つて最と勇ましく横須賀軍港に歸り來れり是れより先き、朝來の春雨霏々として降りつゝありしも艦隊の入港前後より一天全く霽れ渡りて侍ち設けたる出迎へ家族等は舷梯を降りる間さへも、もどかしく何れも兩艦を取り巻いて手巾を振るもの帽子を翳すもの喜ぶもの笑ふもの、皆な取り／＼に一別以來の舊情を披瀝なしてける

斯る中にも横須賀着の列車に搭じて來着せる、齋藤海軍大臣、伊集院軍令部長、井上軍事參議官を始め其の他の將星雲の如く、陸軍よりは片岡大將等續々淺間に登艦し來りたれば乗組員は上甲板に整列して之れを迎へぬ

諸將等は一旦將官室に入りて乗組員と久瀾を叙し暫時談笑に時を移したる後ち、海軍大臣は乗組將校及び候補生を上甲板に集合して一場の訓示を述べて退艦するや

今迄感慨深く聞き居たる、片岡大將はツカ／＼と兩艦長及び川島武男の前に進みて堅く握手し玉ひ續いて候補生の前列なる最初の一人の手を握りて

『お目出度う』

と述べられければ、百數十名の候補生は恰かも言ひ合したるが如くに、嬉し涙を流しける

武男は此の有様を見るより直ちに臺灣澎湖沖に松島の爆沈に殉せる、大將の令息を想ひるなり

當時彼の變災なくして令息が此の横須賀に着して、今日の如く嬉しげに此の甲板に並びて、子は父を迎へ父は我が子の歸朝を祝して、温かさ握手を交換し玉ふあらば其の喜びは如何なるべきに、と思ふに付けても、大將の心の裡を想ひ圖りて何とな

く其の悄然たる姿に、哀れを催ふしつゝありしが

時しも大將が、候補生等の悦びを受けて歩を此方へ移さるゝを見て、づと、其の側

に進み寄り

『閣下』

と云ひさま無手と大將の手を握りぬ

「武男君久し振りぢやねエ……」

優しき顔に笑みを浮べて

『お目出度う』

と再び武男の手を握り返し更に聲を潜めて

『毅一も居つたならばね……』

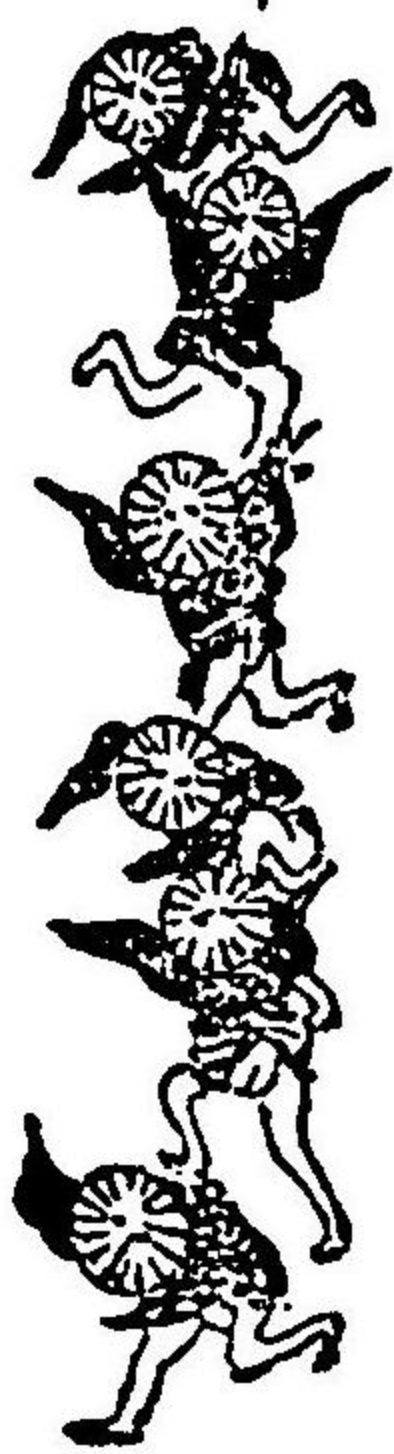
としばし黙然たりしが忽ち元の笑顔となりて

『武男さん御用が済んだら、東京でゆるく御目にかゝりましょう……』

* * * * *

殘る武男終

聽て大將の姿は他の將星と共に消え去りぬ、持別の任務を終りて恙なく、歸朝せる
川島武男は間もなく、海軍大佐に進み今や參謀官として樞要の地位に在るは實に目
出度きの限りと云ふべし



明治四十四年五月十三日印刷
明治四十四年五月十七日發行

殘る武男與附
定價金四十錢

著 者 秋 葉 生

發 行 者 武 田 音 作
東京市淺草區黑船町十五番地

印 刷 者 菅 井 十 一 郎
東京市神田區松住町五番地

印 刷 所 碓 文 舍
東京市淺草區黑船町十五番地

發 行 所

武 田 博 盛 堂

山田 呂峰氏著

小説女

天

下

最も詩趣多きものは本書なり最も雅致を含むものは本書なり最も奇絶なるものも本書なり、最も壯快なるものも本書なり、最も感傷を捨て抽象的に精美を發揮するものも本書なり、即ち『小説女天下』は恰も霞中の花の如く、水底の月の如し、或は汽車を驅りて富岳の下を過るが如く、或は汽船を走らして松島の灣を行くが如し、又杜鵑の如く、電光の如く、薺花の如く、或は一瞬の間を能く、人性人情の大觀を示して、終に奇絶壯絶を叫びしむるに至る、眞に近代の快著と云ふべき乎。

山田 呂峰氏著

▲口繪寫眞版挿入
▲三百餘頁美本
▲定價參拾錢郵稅六錢

小説地

獄

諸葛孔明の出師表を讀んで、泣かざる者も、伽羅千代萩を讀めば必ず泣き、李密の陳情表に對して、涙を漣がさるものも、奥州安達原に對しては、必ず涙の漣々たるは何ぞや、他なし、人情を説く事、輕快流麗にして多數の讀者を感せしめ易きが爲めのみ本書又然り、即ち窓下之を繕くあらば、拍案の快、叩頭の愉、翻つて慘憺酷薄、七情交々往來して、喜愛胸間に忘るべからざるの烙印を造るべく眞に小説界近代の白眉と云ふべし、乞ふ滿天下の青年士女幸に愛讀の榮を賜へ。

▲口繪寫眞版挿入
▲三百餘頁美本
▲定價參拾錢郵稅六錢

なにがし氏著 口繪コロタイプ

小説夫人の白白

▲定價六判五美
▲郵稅六錢本

交際場裡の花形として貞淑無二の聞え高さ一夫人あり其富巨萬を積み其人爵第一に位す而も其胸中一箇の秘密を藏して爲めに悶々秋風に泣く讀者は此秘事を解かんと欲して容易に解く事能はず而も周囲の情緒は自ら之を説明する者あり後に春風漸く至りて夫人が胸中の堅氷僅に解くる事を得たれども人や去りて又還らず東海の名勝徒に山紫水明の趣を遺すあるのみ眞に明治文壇の好産物

なにがし氏著 口繪コロタイプ

小説浪

子

▲定價六判五美
▲郵稅六錢本

東海姫氏の國山水明媚なる地に一美人生ず其顔は玉の如く其形は花の如し而も其一生は恰も涙の歴史の如くにして一朝一夜悲雲絶えず其胸を閉し春信來る事遅くして雪は故郷の山を閉す時に一道の光明を認むるあり、雖も道は千里の遠きに隔りて行く事難く時に救の手は其袖に觸れんとすれども夜や黒暗々として之を見るに由なし情に泣かんと欲する者は讀め人心の極致を解せんと欲する者は讀め

無名氏著 鳳齋氏畫

小説かとうぐひす

▲口繪コロタイプ頗美本
▲定價 四十六錢
▲郵税 六錢

無名氏著 鳳齋氏畫

小説後の籠鶯

▲口繪コロタイプ頗美本
▲定價 三十六錢
▲郵税 六錢

是れ當時の新潮流に觸れたる一大傑作なり美人俠兒青春の血に燃ゆる少年一世を料理して自己の抱負を展べんとする大丈夫交々讀者の眼前に現はれて人世極致の情を説く半夜之を播くの人ハ枕上名優の來り舞ふが如き思に接す可し人世を知らんとするの士は是非共一本を購はざる可らず

なにがし著

小説新血の涙

▲定價 三十五錢 郵税六錢
▲口繪コロタイプ頗美本

詩泉滾々として湧き想池漾々として溢るゝ、なにがし氏の材料に富み小説に長ずるは實に明治文壇の珍として何人も其名を知らん事に勉めつゝあり本書血の涙は其最も傑出せるもの、一度び之を繕くあらば痛悔長恨、悲喜交々到りて紳士も泣き令嬢も泣き、軍人壯夫より鬼神魔神に至るまで、豆の如き血の涙に袖を絞らざるものあらむや真に近代の一大快著たり。

なにがし著

小説雪子

▲口繪コロタイプ頗美本
▲定價 三十五錢 郵税六錢

小説雪子其名を聞くに容色艶麗皎々として玉人の如きを知る、もし夫れ春去り夏來りて炎暑赫々燦くが如きの候、緑陰沙邊に座して長大海を睥睨する所、山莊水亭に座して蟬聲流水を靜聽す所、明月清く燈火親しむべき秋の夕べ、木枯吹く寒冬の夜机上之を讀破するあらば、寒暑の苦も知らざるもの、如く身は忽ち春風夢裡の人となるべし幸に愛讀の榮を賜へ。

伊藤清子女史著 寶物寫真口繪

實不 如 歸

▲▲▲紙四六三判美本
▲定價卅五錢郵稅六錢

著者が半生を泣きしたる悲惨の實事談なり而も其經歷甚だ不如歸に似て婦人が社會に於ける薄運の半面を伺ふに足る人間生れて婦人の身となる勿れの一語よく本編の全般を知るに足る蓋し諸君が長夜の好同伴

徳富健次郎先生序文
守田有秋先生著

自 然 と 人

▲▲▲紙四六三判美本
▲定價四十錢郵稅六錢

天の自然と地の人とを併せて其間に藏する一切の詩趣を説破し天地と人世とを説明して趣味津々たる者を本書とす大なる自然と大なる人世とを會得せんとする人は遂に本書を逸す可らざるなり

徳富蘆花先生著「不如歸」愛讀者諸君に告ぐ

秋葉 小 殘 る 武 男

定價四十五錢 郵稅六錢
三 百 余 頁
口繪コロタイプ美本

本書は著者親しく相州逗子に遊び浪子不動の靈祠に詣りて以て悲痛の筆を振ひたる倉箱根馳せて其資を募り伊香保の巖地に至る追想の涙を日露戰役前後に於ける面影、松島艦爆沈當時に於ける某將軍の家庭に浪子武男を慕ふ新橋藝者の戀悉く解剖し來りて真に絶妙を極めたり曩に「不如歸」を詠みて浪子嬢の生涯に涙を紅涙禁するはざるべし。更に本書を繙くあらば愈々浮世の事の儘ならぬに潜然として紅涙禁する能

東洋 散 史 著

ホケ 日 用 素 人 料 理

總字 全一冊
金 字 入 全 一 冊
正價金三十錢 郵稅四錢

一家の主婦と女中が毎日第一番に苦心せらるゝは日々四季折々の料理方である本書は著者が多年の實験と、其の道の材料に通じり又た來客の上下各等級に隨ひて述べたる野菜魚類鳥類肉類其他各種の材料により又た來客の上下各等級に隨ひて述べたるものなれば如何なる家庭にても必要なるは勿論又進物として最上の珍書と云ふべきなり。

山田呂峰氏著

山中古洞君畫

小説 金色夜叉

▲紙數 三百頁
▲定價 四十六錢 郵稅 六錢

夜叉と紳名ある妖美人なり其富幾百萬なるを知らず而も此美人の爲めには子爵の貴公子泣き博士の令嬢泣き更に子故の暗に老婦を死せしめ其子を鐵窓の下に呻吟せしむ眞に一幅の百鬼夜行圖なり

話學研究會編

日英會話 六十月間卒業

▲定價 二十五錢
▲郵稅 四錢

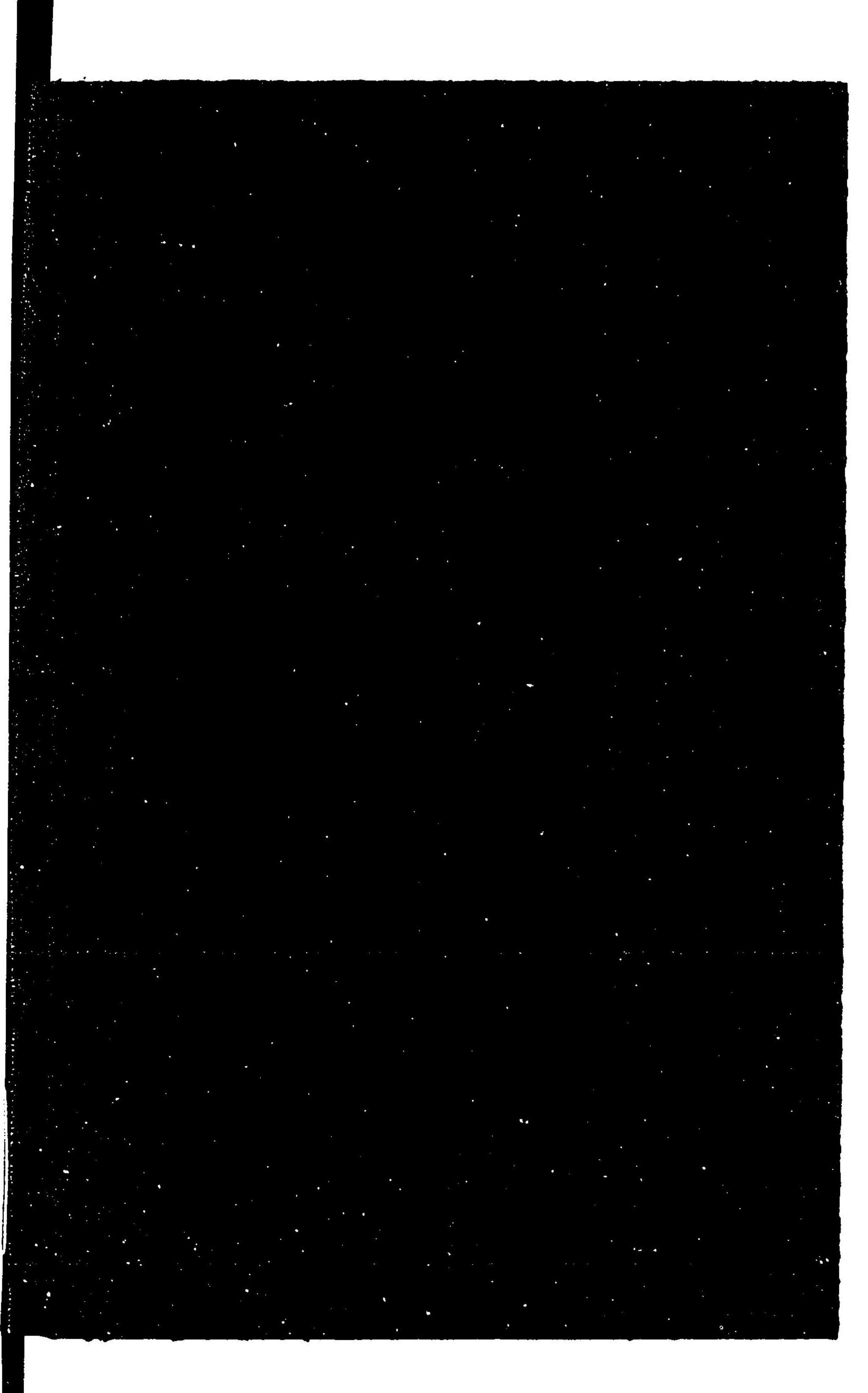
日英會話の一般を六十月間にして習得せしむる好著なり業務の餘暇英語を學ばんと欲する者は必ず此書に依らざる可らず

話學研究會編

二十世紀 英語會話

▲定價 二十錢
▲郵稅 四錢

世界の列強に伍したる我國は、世界語たる英語を解せざる可らず此書可啻親切に日英の會話を教へ眞に間然する處なし英人と言葉を交へんと欲せば必ず此書を讀まざる可



特13

311

残る武男

国立国会図書館

094881-000-7

特13-311

残る武男

秋葉生/著

M44

DBQ-2465



